

通訳案内士試験 <日本歴史>対策
<Youtube セミナー>資料

ハロー通訳アカデミー
植山源一郎

<合格への道>

「彼を知り己を知れば百戦殆からず」と申します。まず、既出問題(3~4年分)を見て、出題傾向、自分の強い分野、弱い分野を知ることがすべての出発点になります。

●第1次筆記試験の【問題】と【解答】

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/e/2845f5d7a69a28560bf812b8df6e5a72>

次に<受験の感想><合格体験記>を読むことにより、合格者の足跡をたどり、合格への道のりを追体験してください。<受験の感想><合格体験記>は合格への道筋を示してくれます。また、勉強に行き詰まったときに<受験の感想><合格体験記>を読むと、必ず道が開けます。

●2017年度<合格体験記>

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/c/15e28f93d37c0b25e1252138afadf105>

●2016年度<合格体験記>

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/c/d43731fa01765b4b15e8ccdd155e4d6d>

●2015年度<合格体験記>

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/c/bc048c23649bef998f16abe9fa91804c>

●2014年度<合格体験記>

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/c/a8ad7ef5199efb807f9c59c5e4424891>

<日本歴史>の試験方法・合格判定

(1) 試験方法

・試験は、外国人観光旅客が多く訪れている又は外国人観光旅客の評価が高い観光資源に関連する日本歴史についての主要な事柄及び現在の日本人の生活、文化、価値観等につながるような日本歴史についての主要な事柄(日本と世界との関わりを含む。)のうち、外国人観光旅客の関心の強いものについての基礎的な知識を問うものとする。

- ・試験の方法は、**多肢選択式(マークシート方式)**とする。
- ・試験時間は、**40分**とする。
- ・試験の満点は、**100点**とする。
- ・問題の数は、**40問**程度とする。
- ・内容は、**地図や写真を使った問題を中心としたもの**とする。

(2) 合否判定

- ・合否判定は、原則として **70点**を合格基準点として行う。
- ・実際の平均点が、合格基準点から著しく乖離した科目については、I(4)において記載した合格基準の事後的な調整を行うこともある点に留意すること。

<日本歴史>の問題作成委員の変遷

●問題作成委員

マークシート方式が採用された2004年度から2016年度までの出題形式、内容、配点構成を分析すると、<日本歴史>の問題作成委員は、3名が担当したと考えられる。

A氏:2004年度～2005年度を担当

B氏:2006年度～2014年度を担当

C氏:2015年度～2016年度を担当

C氏が、2017年度を担当するかどうかは、不明であるが、2015年、2016年の出題傾向はよく見ておくことが大切である。

<日本歴史>の大問、小問の配点構成

●2011年度～2014年度

【大問1】2点×10題＝20点

【大問2】3点× 5題＝15点

【大問3】3点× 5題＝15点

【大問4】3点× 5題＝15点

【大問5】3点× 5題＝15点

【大問6】2点×10題＝20点

●2015年度

【大問1】2点×5題 + 3点×15題＝55点

【大問2】3点×10題＝30点

【大問3】3点× 5題＝15点

●2016年度

【大問1】2点×9題 + 3点× 4題＝40点

【大問2】2点×9題 + 3点×14題＝60点

<無料学習サイト>

●マラソンセミナー<日本地理>動画学習コーナー

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/e/aa9caa987007e8ef9f390a0a88c6e667>

●マラソンセミナー<日本地理>音声学習コーナー

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/e/89f4804d90b83a179d69e92565f0a210>

●第1次邦文試験対策<特訓1800題>無料自習学習コーナー

http://hello.ac/streaming/clinic/clinic_houbun/index.html

●(写真問題対策)<Flashcards Deluxe>による学習法

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/e/35e45334cca19e6f8df802b215963d40>

●<Flashcards Deluxe>でも、<特訓1800題>を4択問題形式で学習できます。

2017年度は、「写真問題」「世界遺産」が合否のカギ

●配点の約6割を占める「写真問題」が合否のカギ！

2015年度、2016年度の出題者は、その出題傾向から、2014年度以前の出題者とは明らかに違う出題者と考えられる。2015年度、2016年度の問題の特徴の一つは、**写真の多用**である。2015年度には**12枚**、2016年度には**17枚の写真**が、それぞれ、使用され、「写真問題」が占める配点は、**2015年度が59点**、**2016年度が64点**と、まさに、「写真問題」が合否のカギと言える状態である。

●「世界遺産」の寺神社の占める割合が高いので注意！

「写真問題」の中で、「世界遺産」の**寺神社の占める割合が**、**2015年度が67%**、**2016年度が50%**と、半分以上となっているので、特に、寺神社の写真には注意が必要である。

●対策

これは、ガイドラインの「内容は、地図や写真を使った問題を中心としたものとする。」に従ったものであるが、2017年度も、この傾向は引き継がれるものと予想される。従って、受験者は、<Flashcards Deluxe>(暗記カードアプリ)の日本歴史にでる写真(138枚)(特に、寺神社)をしっかりと勉強しておく必要がある。

●<Flashcards Deluxe>(暗記カードアプリ)を使い倒せ！

<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/e/5453925522e7fc930961b9911dac446a>

2015年度、2016年度に出題された「写真問題」の内容と配点

●2015年度(写真問題の合計:59点)

- 【大問1】(1)問2: **興福寺**(2点)(世界遺産)
- 【大問1】(1)問3: **東大寺・大仏殿**(2点)(世界遺産)
- 【大問1】(1)問4: **唐招提寺**(2点)(世界遺産)
- 【大問1】(2)問4: **高舞台(厳島神社)**(3点)(世界遺産)
- 【大問1】(3)問1: **姫路城**(6点)(世界遺産)
- 【大問1】(3)問4: **富岡製糸場**(9点)(世界遺産)
- 【大問1】(4)問4: **富岡製糸場の錦絵**(5点)(世界遺産)
- 【大問2】(1): **慈照寺**(6点)(世界遺産)
- 【大問2】(2): **達谷窟毘沙門堂**(6点)
- 【大問2】(3): **八坂神社**(6点)(祇園祭が世界無形文化遺産)
- 【大問2】(4): **伏見稲荷大社**(6点)
- 【大問2】(5): **桂離宮**(6点)(世界遺産)

・上記の内、寺神社の占める割合:12問中8問で、67%。**世界遺産が九つ。**

●2016年度(写真問題の合計:64点)

- 【大問1】(1): **法隆寺夢殿**(2点)(世界遺産)
- 【大問1】(2): **薬師寺**(2点)(世界遺産)
- 【大問1】(3): **東大寺正倉院**(2点)(世界遺産)
- 【大問1】(4): **阿修羅像**(2点)
- 【大問1】(5): **教王護国寺(東寺)**(2点)
- 【大問1】(6): **平等院(鳳凰堂)**(2点)(世界遺産)
- 【大問1】(7): **大覚寺**(2点)(世界遺産)
- 【大問1】(8): **四天王寺**(2点)
- 【大問1】(9): **赤間神宮**(6点)
- 【大問1】(10): **札幌市時計台**(7点)
- 【大問1】(11)問4: **神宮寺(若狭神宮寺)**(9点)
- 【大問2】(1): (A)銅鐸、(B)埴輪、(C)土偶(2点×9=18点)
- 【大問2】(5): **蒙古襲来絵詞**(6点)
- 【大問2】(8): **長崎港図(丸山応挙)**(3点)

【大問2】(9): 支倉常長の肖像画(9点)

・上記の内、寺神社の占める割合: 18問中9問で、50%。世界遺産が五つ。

出題が予想される写真

●出題が予想される写真(重要度★★★★★)

・<Flashcards Deluxe>の「日本歴史に出る写真」を是非ご利用ください
<http://blog.goo.ne.jp/gu6970/e/35e45334cca19e6f8df802b215963d40>

- ・土偶(縄文時代)(2016)
- ・銅鐸(弥生時代)(2016)
- ・埴輪(古墳時代)(2016)
- ・高松塚古墳壁画(2010)
- ・弾正台(2011)
- ・大宰府天満宮(2009)(2011)
- ・四天王寺五重塔(2016)
- ・法隆寺救世観音像(2007)
- ・法隆寺百済観音像(2007)
- ・法隆寺金堂(2009)(2011)
- ・法隆寺金堂釈迦三尊像(鞍作鳥)(2006)
- ・法隆寺夢殿(2016)
- ・法隆寺金堂壁画(白鳳文化)(2010)
- ・若狭神宮寺(2016)
- ・薬師寺金堂(2016)
- ・薬師寺東塔
- ・薬師寺薬師三尊像
- ・法華寺十一面観音像(2010)
- ・東大寺大仏殿(2015)
- ・東大寺三月堂(2011)
- ・東大寺正倉院(2011)(2016)
- ・東大寺正倉院鳥毛立女屏風(2009)(2010)
- ・東大寺南大門(勸進上人=重源)(2006)
- ・東大寺南大門金剛力士像
- ・東大寺不空羼索観音像
- ・臼杵磨崖仏(大分県)
- ・平等院鳳凰堂(阿弥陀如来像)(定朝)(藤原頼通)(2006)(2007)(2010)(2012)(2016)
- ・唐招提寺(2015)
- ・教王護国寺(東寺)(2016)
- ・巖島神社(2008)
- ・巖島神社(舞楽)(2015)
- ・興福寺(2015)
- ・興福寺阿修羅像(2016)
- ・三十三間堂(2010)
- ・比叡山延暦寺(2009)
- ・鶴岡八幡宮(2009)
- ・信濃善光寺(2009)
- ・下野薬師寺(2009)
- ・鳥獣戯画(鳥羽僧正)(2008)
- ・清水寺(2009)

- ・達谷窟毘沙門堂(2015)
- ・大覚寺(御影堂)(2016)
- ・京都八坂神社(祇園祭)(2015)
- ・伏見稻荷大社(千本鳥居)(2015)
- ・西本願寺飛雲閣(2008)
- ・慈照寺銀閣(足利義政)(2007)
- ・慈照寺東求堂(2008)(2015)
- ・西本願寺飛雲閣
- ・醍醐寺三宝院(2008)
- ・赤間神宮(2016)
- ・中尊寺金色堂(藤原清衡)(2009)
- ・中宮寺天寿国繡帳(2010)(2011)
- ・中宮寺半跏思惟像(2010)
- ・広隆寺半跏思惟像(2009)
- ・室生寺釈迦如来像 (2010)
- ・当麻寺当麻曼荼羅(2010)(2011)
- ・観心寺如意輪観音像(2010)
- ・神護寺金堂薬師如来像(2010)
- ・円覚寺舍利殿(禅宗様)
- ・竜安寺石庭
- ・富貴寺大堂(大分県)
- ・修学院離宮(後水尾天皇)(2008)
- ・桂離宮(2012)(2015)
- ・天龍寺(2010)(2008)
- ・平安神宮(2010)
- ・蒙古襲来絵詞(2016)
- ・姫路城(2015)
- ・二条城(2009)(2011)
- ・下鴨神社(2009)
- ・聚楽第(2011)
- ・日光東照宮
- ・日光東照宮陽明門(2009)
- ・弹琴美人(鈴木春信)
- ・五稜郭(2011)
- ・ニコライ堂(2010)
- ・赤坂離宮(2010)
- ・花沢館(2011)
- ・洛中洛外図屏風(2010)
- ・慈母観音(狩野芳崖)(2006)
- ・見返り美人図(菱川師宣)(2006)
- ・支倉常長の肖像画(2016)
- ・長崎港図(丸山応挙)(2016)
- ・紅白梅図屏風(尾形光琳)
- ・富嶽三十六景(葛飾北斎)(2007)
- ・東海道五十三次(歌川広重)(2007)
- ・龍虎図(橋本雅邦)
- ・麗子像(黒田清輝)(2007)
- ・札幌市時計台(2016)
- ・富岡製糸場(2015)
- ・富岡製糸場「錦絵」(2015)

予想問題(最重要事項のまとめ)

●文化

- **縄文文化**: 旧石器時代と縄文時代の違いは、土器の出現や竪穴住居の普及、貝塚の形式などがある。縄文時代の終わりについては、地域差が大きいものの、定型的な水田耕作を特徴とする弥生文化の登場を契機とするが、その年代については紀元前数世紀から紀元前10世紀頃までで、多くの議論がある。(2016)
- **弥生文化**: 弥生時代の特徴は、(1)稲作が始まったこと(2)金属器の使用が始まったこと(3)貧富や身分の差が表れ始めたことである。その身分格差は、弥生時代の墓の発掘により伺い知ることが出来る。
- **古墳文化**: 古墳時代は3世紀半ば過ぎから7世紀末頃までの約400年間を指すことが多い。中でも3世紀半ば過ぎから6世紀末までは、前方後円墳が全国で造り続けられた時代であり、前方後円墳の時代と呼ばれる。7世紀に入っても、方墳・円墳、八角墳などが造り続けられるが、この時期を古墳時代終末期と呼ぶ。西暦266年から413年にかけて中国の歴史文献における倭国の記述がなく詳細を把握できないため、この間は「空白の4世紀」とも呼ばれている。(2016)
- **飛鳥文化(592～645)**: 推古朝を頂点として大和を中心に華開いた仏教文化である。時期は、一般に仏教渡来から大化の改新までをいう。朝鮮半島の百済や高句麗を通じて伝えられた中国大陸の南北朝の文化の影響を受け、国際性豊かな文化でもある。多くの大寺院が建立され始め、仏教文化の最初の興隆期であった。(2016)
- **白鳳文化(645～710)**: 645年(大化元年)の大化の改新から710年(和銅3年)の平城京遷都までの飛鳥時代に華咲いたおおらかな文化である。唐との交通により、その影響を受けた仏教美術にすぐれた作品が多い。薬師寺の東塔や薬師三尊像、法隆寺金堂壁画などがその代表。また、国史の編纂が開始され、漢詩・和歌なども盛んとなった。天智天皇のときに最盛期を迎えた。(2014)
- **天平文化(710～794)**: 7世紀終わり頃から8世紀の中頃までをいい、奈良の都平城京を中心にして華開いた貴族・仏教文化である。聖武天皇のときに最盛期で、天平(729～749年)はその時期の年号に由来する。唐文化を介して遠く西域、インド、ペルシアなど世界各地の文化を受容し、新羅(しらぎ)や渤海(ぼっかい)との往来も行なわれた。(2014)(2016)
- **弘仁・貞観文化(810～877)**: 主として美術史上用いられる名称。弘仁(810～824)、貞観(859～877)の平安時代前期を中心とした文化。美術史においては平安時代を2期に分け、後期を藤原文化とするのに対し、延暦13(794)年の平安遷都から遣唐使が廃止された寛平6(894)年までの約1世紀の平安時代前期の文化を呼ぶ。(2014)
- **国風文化(10世紀～12世紀)**: 10世紀の初め頃から11世紀の摂関政治期を中心とする文化であり、12世紀の院政期文化にも広く影響を与えた。以前は894年の遣唐使停止により中国の影響を抜け出し、日本独自の文化が発展したと一般的に解釈されてきた。しかし、遣唐使廃止後も対外交流は盛んで中国の文物は多く日本に流入していた。そのため、遣唐使停止を国風文化の画期とすることは誤りであり、遣唐使停止は日本文化の国風化を加速させる要因であったとみることが適当である。(2014)
- **院政期文化**: 平安時代末葉の11世紀後半から鎌倉幕府成立に至る12世紀末にかけての日本の文化。院政期は、日本社会史上、貴族勢力の衰退と武士勢力の伸長という過渡期に位置しており、文化の面でもこのような時代の気風を反映した新しい動きがみられた。
- **鎌倉文化**: 鎌倉幕府の成立した12世紀末葉から幕府が滅亡した14世紀前半にかけての日本の文化。王朝国家からの自立を指向する本格的な武家政権が東国に開かれた時代であり、各方面で新しい文化的所産が生まれた。
- **北山文化**: 室町時代初期の文化で、三代将軍足利義満(1358～1408)の北山山荘に代表され、14世紀末～15世紀前半までをさす。東山文化に対して使われる言葉である。ただし、今日の歴史学では東山文化と合わせて「室町文化」と呼ぶのが一般的である。
- **東山文化**: 室町時代中期の文化で、八代将軍足利義政(1436～1491)が築いた京都の東山山荘を中心に、武家、公家、禅僧らの文化が融合して生まれた。慈照寺銀閣は東山文化を代表する建築である。

• 詳しくは、下記の<日本史の時代区分と各文化の特徴>をご参照ください。

<http://hello.ac/timeline.pdf>

●日本の世界遺産(合計 20 件)

【世界遺産とは】

世界遺産(World Heritage)とは、1972年のユネスコ(UNESCO)総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(世界遺産条約)に基づいて世界遺産リストに登録された、遺跡、景観、自然など、人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」をもつ物件のことで、移動が不可能な不動産やそれに準ずるものが対象となっている。(←UNESCOを問う問題が2011年度出題)(←平泉が2012年度出題)

日本国内では、文化遺産16件、自然遺産4件の合計20件が登録されている。(2017年5月現在)

【文化遺産】(Cultural Heritage)(計16件)

- (1)法隆寺地域の仏教建造物(1993年12月登録)(2016)
- (2)姫路城(1993年12月登録)(2015)(2015)
- (3)古都京都の文化財(1994年12月登録)
- (4)白川郷・五箇山の合掌造り集落(1995年12月登録)
- (5)原爆ドーム(1996年12月登録)
- (6)厳島神社(1996年12月登録)(2015)
- (7)古都奈良の文化財(1998年12月登録)(2015)
- (8)日光の社寺(1999年12月登録)
- (9)琉球王国のグスク及び関連遺産群(2000年12月登録)
- (10)紀伊山地の霊場と参詣道(2004年7月登録)
- (11)石見銀山遺跡とその文化的景観(2007年6月登録)
- (12)平泉－仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群(2011年6月登録)
- (13)富士山－信仰の対象と芸術の源泉(2013年6月)
- (14)富岡製糸場と絹産業遺産群(2014年6月登録)(2015)
- (15)明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業(2015年7月登録)(2015)
- (16)ル・コルビュジエの建築作品－近代建築への顕著な貢献(国立西洋美術館＝東京都)(2016年7月登録)

【自然遺産】(Natural Heritage)(計4件)

- (1)屋久島(1993年12月登録)
- (2)白神山地(1993年12月登録)
- (3)知床(2005年7月登録)
- (4)小笠原諸島(2011年6月登録)

・詳しくは、下記をご覧ください。

<http://nihon-sekaiisan.com/>

●寺、神社

- ・法隆寺(607): 古代寺院の姿を現在に伝える仏教施設であり、聖徳太子ゆかりの寺院である。金堂、五重塔を中心とする西院伽藍と、夢殿を中心とした東院伽藍に分けられる。西院伽藍は現存する「世界最古の木造建築物群」。(2015)(2016)
- ・薬師寺(680): 奈良県奈良市西ノ京町に所在する寺院であり、興福寺とともに法相宗の大本山である。奈良の文化財の一部として、世界遺産に登録されている。(2011)(2013)(2014)(2016)
- ・興福寺(こうふくじ)(710): 奈良市にある、南都六宗の一つ、法相宗の大本山の寺院である。南都七大寺の一つに数えられる。「古都奈良の文化財」の一部として世界遺産に登録されている。阿修羅像が有名。(2013)(2014)(2015)
- ・東大寺(8世紀): 聖武天皇が建立した寺。「奈良の大仏」として知られる盧舎那仏(るしゃなぶつ)を本尊とし、開山(初代別当)は良弁である。大仏殿は現存する「世界最大の木造建築物」。宝物殿として正倉院が有名。(2015)(2016)
- ・唐招提寺(759): 鑑真が建立した寺院。南都六宗の1つである律宗の総本山。本尊は盧舎那仏、開基(創立者)は鑑真である。(2015)(2016)
- ・高山寺(774): 京都市右京区にある寺院。創建は奈良時代と伝えるが、実質的な開基は、鎌倉時代の明恵である。(2012)(2014)

- ・**中尊寺(850)**:天台宗東北大本山の寺院。本尊は阿弥陀如来。寺伝では円仁の開山とされる。実質的な開基は藤原清衡。
- ・**毛越寺(もうつうじ)(850)**:岩手県西磐井郡平泉町にある天台宗の寺院。開山は円仁(慈覚大師)と伝える。本尊は薬師如来、脇侍は日光菩薩・月光菩薩。(2007)(2009)(2014)
- ・**六波羅蜜寺(951)**:踊り念仏で知られる空也が平安時代中期に造立した十一面観音を本尊とする道場に由来し、当初西光寺と称した。(2014)
- ・**建仁寺(1202)**:京都府京都市東山区にある臨済宗建仁寺派大本山の寺院。本尊は釈迦如来、開基(創立者)は源頼家、開山は栄西である。(2006)(2007)
- ・**永平寺(1246)**:福井県吉田郡永平寺町にある曹洞宗の本山寺院。開山は道元、本尊は釈迦如来・弥勒仏・阿弥陀如来の三世仏である。(2006)(2007)(2015)
- ・**建長寺(けんちょうじ)(1253)**:鎌倉市にある禅宗の寺院で、臨済宗建長寺派の大本山である。(2007)(2014)
- ・**久遠寺(1281)**:山梨県南巨摩郡身延町にある、日蓮宗の総本山(祖山)。(2007)
- ・**円覚寺(1282)**:神奈川県鎌倉市山ノ内にある臨済宗円覚寺派の大本山であり、鎌倉五山第二位に列せられる。本尊は宝冠釈迦如来、開基は北条時宗、開山は無学祖元である。(2007)
- ・**南禅寺(1291)**:京都市左京区南禅寺福地町にある、臨済宗南禅寺派大本山の寺院である。(2008)
- ・**大徳寺(京都府)(1325)**:臨済宗大徳寺派大本山である。本尊は釈迦如来。開基(創立者)は大燈国師宗峰妙超。(2006)
- ・**清浄光寺(1325)**:神奈川県藤沢市にある時宗総本山の寺院。(2008)
- ・**総持寺(1322)**:神奈川県横浜市鶴見区鶴見二丁目にある曹洞宗大本山の寺院である。本尊は釈迦如来。(2006)
- ・**天龍寺(1345)**:京都府京都市右京区にある、臨済宗天龍寺派大本山の寺院。本尊は釈迦如来、開基(創立者)は足利尊氏、開山(初代住職)は夢窓疎石である。(2008)
- ・**相国寺(1392)**:京都市上京区にある臨済宗相国寺派大本山の寺である。本尊は釈迦如来、開基(創立者)は足利義満、開山(初代住職)は夢窓疎石である。(2008)
- ・**寛永寺(1625)**:東京都台東区上野桜木一丁目にある天台宗関東総本山の寺院。開基(創立者)は徳川家光、開山(初代住職)は天海、本尊は薬師如来である。(2008)

●遺跡

- ・**荒神谷遺跡(こうじんだにいせき)**:島根県北東部、出雲市に所在する弥生時代の青銅器埋納遺跡。(2014)
- ・**吉野ヶ里遺跡(よしのがりいせき)**:佐賀県東部、吉野ヶ里丘陵周辺に所在する弥生時代主体の環濠集落の大遺跡群。(2014) (2016)
- ・**原の辻遺跡(はらのつじいせき)**:長崎県壱岐市東部の芦辺から石田にまたがる弥生時代中～後期の遺跡。(2014)
- ・**大塚遺跡(おおつかいせき)**:横浜市港北区中川町、牛久保町にまたがり、早淵川中流左岸の標高約 50m の台地上に位置した弥生時代中期の集落跡。(2014)
- ・**登呂遺跡(とろいせき)**:静岡市登呂にある弥生時代後期の遺跡。(2014)
- ・**稲荷山古墳**:埼玉県行田市にある前方後円墳。金錯銘を有する鉄剣(稲荷山古墳出土鉄剣)が出土したことで知られる。(2007)
- ・**江田船山古墳**:熊本県玉名郡和水町に所在する前方後円墳。日本最古の本格的記録文書である 75 文字の銀象嵌(ぎんぞうがん)銘をもつ大刀が出土したことで著名。(2007)
- ・**高松塚古墳**:奈良県高市郡明日香村に存在する古墳。藤原京期(694 年～710 年)に築造された終末期古墳である。1972 年に極彩色の壁画が発見されたことで一躍注目されるようになった。(2010)

●城、史跡

- ・**志賀島(しかのしま)(福岡県)**:江戸時代に、漢の皇帝が委奴国王に与えたとされる「漢委奴国王」の五つ文字が刻まれた金印が見つかった。(2010)
- ・**大宰府**:奈良、平安時代に対外防備および九州を総管するために筑前国筑紫郡(現在の福岡県太宰府市)におかれた役所。(2009)(2011)(2014)
- ・**水城(みずき)**:664 年大宰府防衛のために築造された土塁。(2014)
- ・**胆沢城(いさわじょう)**:岩手県奥州市にあった古代の城。延暦 21 年(802)蝦夷(えぞ)征討に際し、坂上田村麻呂が築城。(2006)(2013)(2014)

- ・**多賀城**:大和朝廷が蝦夷を制圧するため、軍事的拠点として蝦夷との境界となっていた松島丘陵の南東部分である塩釜丘陵上に設置した。(2006)(2013)(2014)
- ・**首里城(しゅりじょう)**:沖縄県那覇市にある旧琉球王城。昭和 20 年(1945)の沖縄戦で灰燼に帰したが、その後、守礼門・正殿などが復元された。(2006)(2014)
- ・**勝連城(かつれんぐすく)(かつれんじょう)**:沖縄県うるま市勝連南風原(かつれんはえばる)にある城跡。(2006)(2014)
- ・**今帰仁城(なきじんじょう)(なきじんぐすく)**:別名:北山城(ほくざんじょう、ほくざんぐすく)は、沖縄県国頭郡今帰仁村に位置する城跡である。(2006)(2014)
- ・**志波城**:岩手県盛岡市の西の郊外、現在の中太田・下太田にまたがる地域にあった古代城柵(日本の城)。(2006)(2013)(2006)
- ・**秋田城**:日本の古代(奈良時代から平安時代)にかけて、出羽国秋田に置かれた城柵である。(2006)(2013)(2014)
- ・**彦根城**:滋賀県彦根市金亀(こんき)町にある城。彦根藩井伊氏の居城。(2014)
- ・**二条城**:京都市にある江戸時代の日本の城。城内全体が国の史跡に指定されている。さらに 1994 年にはユネスコの世界文化遺産に「古都京都の文化財」として登録されている。(2012)

●乱・事件・戦争など

- ・**壬申の乱(672)**:大友皇子の近江朝廷側と吉野の大海人皇子とが皇位をめぐって争った内乱。大海人皇子が勝利し、後に天武天皇として即位した。
- ・**承和の変(842)**:伴健岑(とものこわみね)・橘逸勢(たちばなのはやなり)らが謀反を企てたとして、二人が流罪となり、仁明天皇の皇太子恒貞親王が廃された事件。(2014)
- ・**応天門の変(866)**:大内裏八省院の正門応天門が炎上した事件をめぐる宮廷の政変。(2008)(2014)(2016)
- ・**安和の変(969)**:冷泉天皇の宮廷に起きた政変。この結果、源高明が失脚して、藤原氏の独占的地位が確立した。(2014)
- ・**壇ノ浦の戦い(1185)**:源平最後の戦い(2011)
- ・**承久の乱(1221)**:後鳥羽上皇による鎌倉幕府打倒の兵乱。幕府軍に上皇方は破れ、後鳥羽上皇ら 3 上皇が流罪となった。(2008)
- ・**文永・弘安の役[元寇](1274、1281)**:2 度にわたる中国の元の日本来襲。暴風の助けもあり元軍は 2 度とも敗退。(2016)
- ・**元弘の変(1331)**:後醍醐天皇が企てた鎌倉幕府討伐の計画。未然に露見し、天皇は笠置(かさぎ)寺や有王山中に逃れたが、翌年捕らえられ、隠岐(おき)に流された。(2014)
- ・**応仁の乱(1467～77)**:細川勝元と山名持豊の対立に將軍継嗣問題と畠山・斯波家の家督争いがからんで起きた 11 年間の大乱。(2008)
- ・**三浦の乱(1510)**:朝鮮の三浦に起った日本人居留民の暴動事件。これより前、朝鮮王朝(李朝)は海防を強化して倭寇にそなえ、懐柔や武力討伐などの倭寇壊滅策をとる一方、日本に使臣を送り倭寇禁圧を要請した。(2014)
- ・**寧波の乱(1523)**:細川氏と大内氏の遣明船の入明に際し、ニンポー(寧波)で引起された武闘事件。(2014)
- ・**島原の乱(1637～38)**:キリシタン農民の一揆。天草四郎時貞を大将に 3 万 8 千人の農民が原城址に立てこもった。(2009)
- ・**由井正雪の乱(1651)**:江戸幕府第 3 代將軍徳川家光の死の直後に、幕府政策への批判と浪人の救済を掲げ幕府転覆を計画した。決起の寸前になり計画の存在を密告され正雪は自刃した。(2009)
- ・**大塩平八郎の乱(1837)**:大坂町奉行所の元与力大塩平八郎とその門人らが起こした江戸幕府に対する反乱。(2009)(2011)
- ・**生田万の乱(1837)**:国学者の生田万が越後国柏崎で貧民救済のため蜂起した事件。天保の大飢饉や大塩平八郎の乱の余波。(2009)
- ・**蛮社の獄(1839)**:江戸幕府による洋学者弾圧事件。渡辺崋山、高野長英らがモリソン号事件を批判したとして逮捕され、処罰された。
- ・**桜田門外の変(1860)**:江戸城桜田門外で水戸藩からの脱藩者 17 名と薩摩藩士 1 名が彦根藩の行列を襲撃、大老井伊直弼を暗殺した事件。(2009)
- ・**坂下門外の変(1862)**:江戸城坂下門外にて、尊攘派の水戸浪士 6 人が老中安藤信正を襲撃し、負傷させた事件。(2009)

- ・**寺田屋事件(1862)**: 薩摩藩尊皇派が薩摩藩主の父で事実上の指導者・島津久光によって鎮撫された事件。(2009)
- ・**生野の変(1863)**: 但馬国生野(兵庫県生野町)において尊皇攘夷派が挙兵した事件(2009)
- ・**八月十八日の変(1863)**: 会津藩・薩摩藩を中心とした公武合体派が、長州藩を主とする尊皇攘夷派を京都から追放したクーデター事件。(2009)
- ・**池田屋事件(1864)**: 京都三条木屋町の旅館・池田屋に潜伏していた長州藩・土佐藩などの尊王攘夷派志士を、新選組が襲撃した事件。(2009)
- ・**禁門の変(=蛤御門の変)(1864)**: 京都で起きた武力衝突事件。(2009)(2011)
- ・**鳥羽伏見の戦い(1868)**: 戊辰戦争の緒戦となった戦である。(2011)
- ・**五稜郭の戦い(箱館戦争)(1868~1869)**: 戊辰戦争の局面のひとつで、新政府軍と榎本武揚率いる旧幕府軍との最後の戦闘。(2011)
- ・**血税一揆(1873)**: 徴兵令に反対するために、農民を中心として行われた一揆。徴兵令反対一揆ともよばれる。(2007)
- ・**佐賀の乱(1874)**: 江藤新平らをリーダーとして佐賀で起こった明治政府に対する士族反乱の一つ。(2011)
- ・**萩の乱(1876)**: 山口県萩で起こった明治政府に対する士族の反乱。(2008)(2009)(2011)
- ・**秋月の乱(1876)**: 福岡県秋月で起こった明治政府に対する士族の反乱。(2008)
- ・**神風連の乱(1876)**: 熊本市で起こった明治政府に対する士族の反乱。(2008)
- ・**西南戦争(1877)**: 明治新政府に対する不平士族最大の反乱。鹿児島の子学校生徒を中心とした士族が西郷隆盛を擁して挙兵し、政府軍に鎮圧された。(2008)
- ・**福島事件(1882)**: 自由民権運動のなかで、福島県の自由党員・農民が県令三島通庸の圧政に反抗した事件。(2009)
- ・**秩父事件(1884)**: 埼玉県秩父郡の農民が政府に対して起こした武装蜂起事件。(2007)
- ・**飯田事件(1884)**: 明治政府転覆を狙う挙兵が計画された事件。(2009)
- ・**大津事件(1891)**: 日本を訪問中のロシア帝国皇太子・ニコライが、滋賀県大津市で警備にあっていた警察官・津田三蔵に突然斬りつけられ負傷した暗殺未遂事件。(2009)
- ・**日比谷焼打事件(1905)**: 東京市日比谷公園で行われた日露戦争の講和条約ポーツマス条約に反対する国民集会をきっかけに発生した日本の暴動事件。(2007)
- ・**米騒動(1918)**: 日本で発生した、米の価格急騰に伴う暴動事件。(2007)
- ・**横浜事件(1942~1945)**: 雑誌に掲載された論文がきっかけとなり、編集者、新聞記者ら約 60 人が逮捕され、約 30 人が有罪となり、4 人が獄死した事件。(2008)
- ・**松川事件(1949)**: 福島県の日本国有鉄道(国鉄)東北本線で起きた列車往来妨害事件。(2008)
- ・**下山事件(1949)**: 国鉄総裁下山定則が出勤途中に失踪し、死体となって発見された事件。(2008)
- ・**三鷹事件(1949)**: 日本・東京都北多摩郡三鷹町(現・三鷹市)と武蔵野市にまたがる日本国有鉄道中央本線三鷹駅構内で起きた無人列車暴走事件。(2008)
- ・**砂川事件(1957)**: 基地拡張に反対する砂川闘争をめぐる一連の事件。(2008)

●遣隋使

推古朝の倭国(倭國)が技術や制度を学ぶために隋に派遣した朝貢使のことをいう。600 年(推古 8 年)~618 年(推古 26 年)の 18 年間に 5 回以上派遣されている。なお、日本という名称が使用されたのは遣唐使からである。

●遣唐使

日本が唐に派遣した使節である。日本側の史料では唐の皇帝と対等に交易・外交をしていたとされるが、『旧唐書』や『新唐書』の記述においては、「倭国が唐に派遣した朝貢使」とされる。中国では 619 年に隋が滅び、唐が建ったので、それまで派遣していた遣隋使に替えてこの名称となった。寛平 6 年(894 年)に菅原道真の建議により停止された。現在では中国側において派遣された遣唐使の墓が発見されたりしている。

●法律・条約など

- ・**貞永式目[御成敗式目](1232)**: 北条泰時が定めた鎌倉幕府の基本法律で、日本最初の武家法。源頼朝以来の先例や武家社会の慣習を基準とした。
- ・**武家諸法度(1615~)**: 江戸時代の武家統制のための基本法。1615 年の徳川秀忠の元和令を初めとし、家光

の寛永令で整備された。

- ・**琉米修好条約(1954)**:琉球王国とアメリカ合衆国が締結した条約。(2010)
- ・**日米和親条約(1854)**:老中阿部正弘とアメリカのペリーとの間で締結された条約。神奈川条約とも呼ばれる。(2009)(2010)
- ・**日米修好通商条約(1858)**:江戸幕府が米国総領事ハリスとの間に調印した条約。下田・箱館の他、領事裁判権を認め、関税自主権がないなど極めて不平等な内容であった。
- ・**大日本帝国憲法発布(1889)**:通称、明治憲法。ドイツ憲法に範をとり、伊藤博文らの起草で欽定憲法として発布。
- ・**日米通商航海条約(1894)**:日本とアメリカ合衆国とのあいだの通商航海の自由と内国民待遇を原則とする条約(2010)
- ・**下関条約(1895)**:日清戦争の講和条約。日本全権伊藤博文・陸奥宗光と清国全権李鴻章が下関で調印。(2008)(2011)
- ・**日英同盟(1902)**:桂内閣の時に締結された、ロシアの南下策に対するイギリスとの同盟。(2011)
- ・**ポーツマス条約(1905)**:アメリカのポーツマスで調印した日露戦争の講和条約。(2008)(2009)
- ・**治安維持法(1925)**:加藤高明内閣の時に社会主義運動弾圧のために制定された法律。国体の変革、私有財産の否認を目的とする結社が禁止された。
- ・**普通選挙法(1925)**:治安維持法と引き換えに成立した法律。女性の参政権を認めないなど不完全な普通選挙法であった。
- ・**サンフランシスコ平和条約(1951)**:日本と連合国 48 カ国との間に結ばれた第 2 次世界大戦終結のための講和条約。日本全権は吉田茂。翌年、日本は主権を回復した。
- ・**日米安全保障条約(1951)**:対日講和条約と同時に日米間で結ばれた条約。講和による占領軍撤退後の日本の安全を保障するため、米軍の日本駐留を定めた。(2010)

●政治史関連人物

- ・**倭の五王(5世紀)**:中国の歴史書に記述のある倭国の五人の王、すなわち讃、珍、済、興、武をいう。倭の五王が誰であるかについては諸説ある。(2006)
- ・**厩戸皇子**:聖徳太子のこと。593 年推古天皇の摂政となり、冠位十二階や憲法十七条の制定、小野妹子を遣隋使として派遣するなどを行った。経典注釈書「三経義疏」を著した。(2008)
- ・**中臣鎌足**:大化の改新の中心人物であり、改新後も中大兄皇子(天智天皇)の腹心として活躍し、藤原氏繁栄の礎を築いた。(2012)(2016)
- ・**天武天皇**:飛鳥時代の天皇。天智天皇の弟。672 年壬申の乱で甥の大友皇子と皇位を争って勝利し、翌年即位。八色の姓を定めるなど、天皇を中心とする皇親政治を推進した。
- ・**吉備真備**:奈良時代の学者・公卿。(2012)
- ・**聖武天皇**:奈良時代の天皇。皇后は光明子。深く仏教を信じ、全国に国分寺を建立し、東大寺の大仏を造立した。数多くの遺品が東大寺正倉院宝庫に納められている。
- ・**坂上田村麻呂**:平安初期の武将。延暦 13 年(794)蝦夷(えぞ)を征討し、同 16 年征夷大將軍となった。その後、胆沢城(いさわじょう)を造営し、蝦夷地平定に功を残した。京都の清水寺の創建者と伝えられる。(2014)
- ・**阿弼流為(あてるい)**:奈良末から平安初頭の蝦夷(えみし)の族長。789 年(延暦 8)に胆沢(いさわ)(岩手県南部)を対象とする朝廷の征夷軍の侵攻に対し、強力な抵抗戦を指導して多大の損害を与えた。(2014)
- ・**藤原道長**:後一条・後朱雀・後冷泉の外戚。1017 年太政大臣となり、その子頼通とともに藤原氏の全盛期を現出した。
- ・**平将門**:平安時代中期の関東の豪族。(2013)
- ・**菅原道真**:平安時代の貴族、学者、漢詩人、政治家。遣唐使の廃止を建議した。(2010)
- ・**藤原清衡**:平安末期の陸奥(むつ)の豪族。後三年の役で源義家に味方して異父弟清原家衡らを討ち、陸奥六郡と出羽の管領権を握り、奥州藤原氏の基を築いた。平泉に中尊寺を建立。(2011)(2014)
- ・**源頼朝**:鎌倉幕府初代将軍。1185 年に壇の浦の戦いで平氏を滅亡させた。同年、守護・地頭を設置して封建制度を確立。1192 年征夷大將軍となり鎌倉に幕府を開いた。
- ・**源頼家**:鎌倉幕府第 2 代将軍。頼朝の長男。母は北条政子。父の死後家督を継ぎ、征夷大將軍となった。北条氏の合議制による将軍権能の制限を嫌い、これを討とうとしたが失敗、伊豆の修禅寺に幽閉されて殺された。(2014)
- ・**後鳥羽上皇**:鎌倉幕府に対抗して 1221 年承久の乱を起こすが敗れ、隠岐に流された。歌人としては優れ

「新古今和歌集」を編纂させた(1205年藤原定家ら撰進)。(2010)

- ・**北条泰時**:鎌倉幕府3代執権。承久の乱で功を立て、初代六波羅探題となった。執権就任後、連署・評定衆を置いて合議制を制度化し、1232年には貞永式目[御成敗目]を制定して執権政治の確立に努めた。
- ・**北条時宗**:鎌倉幕府8代執権。文永の役・弘安の役では元軍の撃退に成功。禅宗に深く帰依し、蘭溪道隆の没後、宋より無学祖元を招いて建長寺の住持とし、のち円覚寺の開山とした。
- ・**後醍醐天皇**:鎌倉末期～南北朝初期の天皇。院政を廃して天皇親政を行い、正中の変、元弘の乱を経て鎌倉幕府を滅ぼし建武新政を行った。
- ・**足利義満**:室町幕府3代将軍。京都室町に将軍邸宅「花の御所」を造営。1392年には南北朝の合一を実現した。北山に金閣を建て、北山文化を現出。15世紀初頭明と国交を開き、日明貿易[勘合貿易]を行った。(2016)
- ・**足利義政**:室町幕府8代将軍。1467年家督相続の争いなどから応仁の乱が起こると、将軍職を子の義尚に譲り、自らは東山に銀閣を建て、侘茶、水墨画など芸術三昧の隠居生活を送った。(2008)
- ・**織田信長**:安土桃山時代の武将。桶狭間の戦いに勝利して勢力を拡大、1573年義昭を京都から追放し、室町幕府は滅亡した。1582年本能寺の変で明智光秀に滅ぼされた。
- ・**豊臣秀吉**:安土桃山時代の武将。織田信長に仕え、信長の死後、1590年全国統一を達成。太閤検地によって近世封建社会の基礎を築き、刀狩によって兵農分離を徹底した。晩年、2度の朝鮮出兵を行ったが失敗した。(2008)
- ・**黒田如水**:戦国時代から江戸時代前期にかけての武将・大名。戦国の三英傑に重用され筑前国福岡藩祖となる。キリシタン大名でもあった。(2008)
- ・**徳川家康**:江戸幕府初代将軍。1600年の関ヶ原の戦いで石田三成の西軍を破り天下の実権を握る。1603年征夷大将軍となり江戸幕府を開いた。1615年の大坂夏の陣で豊臣氏を滅ぼし、江戸幕府260年の基礎を固めた。(2008)
- ・**徳川吉宗**:江戸幕府8代将軍。享保の改革を行い、定免法の採用、町火消の創設、目安箱の設置、上げ米の制、相对済し令、新田開発、公事方御定書の制定など、財政再建・幕政改革に努めた。(2012)
- ・**田沼意次**:江戸時代中期の旗本、のち大名、江戸幕府老中。遠江相良藩の初代藩主である。(2012)
- ・**新井白石**:江戸中期の儒者・政治家。6・7代将軍の下で「正徳の治」を行う。著書に「読史余論」「西洋紀聞」など。(2007)(2010)(2011)(2014)
- ・**水野忠邦**:江戸時代後期の大名・老中。肥前唐津藩主、のち遠州浜松藩主。(2012)
- ・**柳沢吉保**:江戸時代前期の幕府側用人・譜代大名。第5代将軍徳川綱吉の寵愛を受けて、元禄時代には大老格として幕政を主導した。(2012)
- ・**間宮林蔵**:江戸時代後期の隠密、探検家。樺太が島である事を確認した事で知られる。
- ・**伊能忠敬**:江戸時代の商人・測量家である。足かけ17年をかけて全国を測量し「大日本沿海輿地全図」を完成させ、日本史上はじめて国土の正確な姿を明らかにした。
- ・**伊達政宗**:出羽国と陸奥国の戦国大名・伊達氏の第17代当主。仙台藩初代藩主。支倉常長を欧州に派遣。
- ・**高杉晋作**:松下村塾で学んだ長州藩士。奇兵隊を組織。功山寺挙兵。
- ・**坂本龍馬**:土佐郷土株を持つ裕福な商家に生まれ、脱藩した後は志士として活動し、薩長同盟の斡旋、大政奉還の成立に尽力するなど倒幕および明治維新に影響を与えた。大政奉還成立の1ヶ月後に近江屋事件で暗殺された。
- ・**西郷隆盛**:薩摩藩の下級武士として尊攘運動に活躍し、1866年薩長同盟を締結。戊辰戦争の参謀。1871年廃藩置県に尽力、征韓論に敗れ下野。1877年、薩摩の士族にかつがれて西南戦争を起こしたが、敗れて自刃した。(2008)
- ・**伊藤博文**:松下村塾に学び、討幕運動に活躍。明治政府にあつて、帝国憲法の制定、天皇制の確立に尽力。初代首相・枢密院議長・立憲政友会総裁などを歴任。組閣四度に及び、その間日清戦争を遂行。(2006)(2008)(2011)(2014)
- ・**森有礼**:日本初代の文部大臣。(2008)
- ・**小村寿太郎**:明治時代の外交官。日露戦争(1904~05)後のポーツマス会議では、第1次桂内閣のもと日本全権として講和条約を締結した。1911年には第2次桂内閣の外相として、関税自主権の完全回復に成功した。
- ・**陸奥宗光**:日本の政治家、外交官、武士。明治初期に行われた版籍奉還、廃藩置県、徴兵令、地租改正に大きな影響を与えた。また、カミノリ大臣と呼ばれ、伊藤内閣の外務大臣として不平等条約の改正に辣腕を

振るった。

- ・**原敬**:1918 年米騒動のため寺内正毅内閣が倒れると、その後を受けてわが国最初の本格的政党内閣を組織。「平民宰相」として国民に歓迎された。
- ・**加藤高明**:憲政会党主。第2次護憲運動の後に、1925 年「普通選挙法」とともに「治安維持法」を公布した。
- ・**東久邇稔彦**:旧皇族、軍人。第2 次大戦直後の首相。(2014)
- ・**吉田茂**:第2 次大戦後の占領体制下における日本の保守政治を代表する政治家。(2013)(2014)
- ・**鳩山一郎**:政治家。戦時中大政翼賛会に反対した数少ない政治家。(2013)(2014)
- ・**片山哲**:大正・昭和期の弁護士、政治家。戦後日本社会党結成に参加、書記長に就任、46 年委員長となる。(2014)
- ・**幣原喜重郎**:第 1 次世界大戦後のワシントン体制のもとで活躍し、当時の日本外交を代表する外交官。(2013)(2014)
- ・**岸信介**:義弟松岡洋右や東條英機、その片腕の星野直樹、日産の鮎川義介らとともに満州の「ニキ三スケ」と呼ばれた。

●キリシタン大名

- ・**有馬晴信**:(2007)(2009)
- ・**大友宗麟**:(2007)(2009)
- ・**大村純忠**:(2007)(2009)
- ・**高山右近**:(2007)
- ・**小西行長**:(2007)

●奥州藤原氏 4 代 100 年の栄華

- 藤原清衡**:(2014)(2011)
- 藤原基衡**:(2011)
- 藤原秀衡**:(2011)
- 藤原泰衡**:(2011)

●僧侶・神道家

- ・**最澄**:平安初期の僧。天台宗の開祖。比叡山に延暦寺を建立。山家学生式を定め、大乘戒壇の設置を訴えた。(2010)
- ・**空海**:平安初期の僧。真言宗の開祖。高野山に金剛峯寺を建立。綜芸種智院を京都に開設した。三筆のひとり。(2010)
- ・**源信**:平安中期の僧。「恵心僧都」とも。比叡山に学ぶ。著書「往生要集」によって日本浄土教の祖とされる。(2011)(2013)
- ・**空也**:平安中期の僧。天台宗空也派の祖。常に市中に立って庶民に念仏をすすめ、貴賤(きせん)を問わず幅広い帰依者を得て、阿弥陀の聖・市の聖と尊称された。(2014)
- ・**重源**:鎌倉初期の浄土宗の僧。密教を学んだのち、法然から浄土教を学び諸国を遊行。東大寺再建のための大勧進職に任じられ、天竺様式をとり入れた大仏殿を完成。(2014)
- ・**法然**:平安後期～鎌倉初期の僧。浄土宗の開祖。専修念仏による往生を説いた。主著「選択本願念仏集」。(2006)(2013)(2016)
- ・**栄西**:平安後期～鎌倉初期の禅僧。臨済宗(禅宗)の祖。京都に建仁寺を建立。著書「興禅護国論」「喫茶養生記」。(2010)(2011)
- ・**親鸞**:鎌倉時代の僧。浄土真宗の開祖。師は法然。主著「教行信証」。「歎異抄」は弟子唯円の編による法話集。(2010)(2011)(2013)(2016)
- ・**道元**:鎌倉時代の禅僧。曹洞宗(禅宗)の開祖。越前に永平寺を建立。「只管打坐」を唱え、著書に「正法眼蔵」がある。(2010)(2011)(2013)
- ・**日蓮**:鎌倉時代の僧。仏法の真髄は法華経にあると悟り、日蓮宗(法華宗)を開いた。主著「立正安国論」。(2010)(2013)(2016)
- ・**一遍**:鎌倉時代の僧。時宗の開祖。踊念仏により時宗の普及に努めた。「一遍上人語録」は法話集。(2010)(2011)(2013)
- ・**無学祖元**:鎌倉時代の臨済宗の僧。建長寺・円覚寺に兼住して日本の臨済宗に影響を与える。

(2006)(2008)

- ・蘭溪道隆:鎌倉時代中期の南宋から渡来した禅僧・大覚派の祖。(2006)(2008)
- ・夢窓疎石:鎌倉末期・南北朝時代の禅僧。後醍醐天皇、足利尊氏の帰依を得た。西芳寺、天竜寺の庭園をつくる。(2006)(2008)
- ・蓮如:室町時代の浄土真宗の僧。本願寺第8世。本願寺中興の祖。(2010)(2013)
- ・吉田兼俱(よしだかねとも):室町時代の神道家吉田神社の神職。本地垂迹説に対して神主仏徒説を唱え、陰陽五行説などを加えて吉田神道を大成。(2014)
- ・度会家行(わたらいいえゆき):南北朝時代、伊勢神道を大成した神道家。南北朝時代の勤王家として北畠親房に大きな影響を与えた。(2014)
- ・山崎闇斎:江戸時代前期の儒者、神道家。著作に「文会筆録」など。(2007)(2014)

●芸術家

- ・鞍作鳥[止利仏師]:飛鳥時代の仏師。代表作は飛鳥寺「釈迦如来像」[飛鳥大仏]、法隆寺金堂「釈迦三尊像」。(2008)
- ・紀貫之:平安初期の貴族・歌人。醍醐天皇勅撰の「古今和歌集」の撰者の一人。著作に「土佐日記」がある。(2008)(2009)(2010)
- ・定朝:平安中期の仏師。大量生産の可能な寄木造の手法を確立した。代表作は平等院鳳凰堂「阿弥陀如来像」。(2006)
- ・運慶:平安末期から鎌倉初期の仏師。豪放な力強さと写実性に特色があり、鎌倉新様式を築いた。代表作は快慶との合作による東大寺南大門「金剛力士像」。(2006)(2014)
- ・快慶:鎌倉時代の仏師。運慶の力強い作風と比べて、流麗で親しみやすく安阿弥様(よう)と称される。作品は、東大寺の阿弥陀如来・地藏菩薩像などが残る。(2014)
- ・湛慶:鎌倉時代の仏師。父とともに東大寺、興福寺の復興造仏に従事。また高野山の金剛力士像、三十三間堂本堂の中尊千手観音像なども制作。(2014)
- ・世阿弥:室町初期の能の大成者。父・観阿弥とともに足利義満の保護を受ける。「風姿花伝[花伝書]」を著す。
- ・雪舟:室町後期の画僧。日本の水墨画を完成させた。代表作は「四季山水図巻[山水長巻]」「秋冬山水図」。(2009)(2012)
- ・狩野永徳:安土桃山時代の画家。信長・秀吉に仕え、豪壮な障壁画を描いた。代表作に「唐獅子図屏風」。(2009)(2010)
- ・狩野山楽:桃山時代の画家。狩野永徳の弟子となり、師を助けて活躍した。代表作に、大覚寺宸殿・正寝殿の「牡丹図」「松鷹図」などの障壁画、「車争図屏風」「龍虎図屏風」などがある。(2011)(2014)
- ・海北友松:桃山時代の画家。画技は狩野元信・狩野永徳に学んだとされるが、永徳の気宇の大きさと宋元画の精神性を止揚した独特の画境を開拓した。(2011)(2014)
- ・長谷川等伯:安土桃山時代から江戸時代初期にかけての絵師。狩野永徳、海北友松、雲谷等顔らと並び桃山時代を代表する画人である。(2009)(2011)
- ・松尾芭蕉:江戸前期の俳人。蕉風俳諧を確立。東北地方を旅し、多くの紀行文を残した。代表作「奥の細道」。
- ・井原西鶴:浮世草子作者。代表作は「好色一代男」(好色物)、「日本永代蔵」「世間胸算用」(町人物)。(2013)
- ・菱川師宣:江戸前期の浮世絵師。浮世絵の祖とされる。代表作に「見返り美人」がある。(2008)(2010)
- ・尾形光琳:江戸中期の画家。俵屋宗達の画風の影響を強く受ける。代表作「紅白梅図屏風」「燕子花図屏風」。(2008)(2011)
- ・渡辺崋山:江戸時代後期の武士、画家。三河国田原藩の藩士であり、のち家老となった。(2008)
- ・司馬江漢:江戸時代の絵師、蘭学者。浮世絵師の鈴木春重は同一人物。(2008)
- ・歌川広重:江戸時代末期の浮世絵師。代表作「東海道五十三次」(2011)
- ・葛飾北斎:江戸時代後期の浮世絵師。化政文化を代表する一人。代表作「富嶽三十六景」(2011)
- ・喜多川歌麿:江戸時代の浮世絵師。(2008)(2011)
- ・鈴木春信:江戸時代の美人画の浮世絵師(2008)(2011)
- ・東洲斎写楽:江戸時代中期の浮世絵師。(2011)
- ・円山応挙:江戸時代中期～後期の絵師。近現代の京都画壇にまでその系統が続く「円山派」の祖であり、写生を重視した親しみやすい画風が特色である。(2009)

- ・滝廉太郎:音楽家、作曲家。明治の西洋音楽黎明期における代表的な音楽家の一人。(2011)
- ・菱田春草(ひしだしゅんそう)(1874~1911):明治時代の日本画家。岡倉天心にまなぶ。のち天心らの日本美術院創立に参加。代表作に「落葉」「黒き猫」。(2014)
- ・岡倉天心(1863~1913):美術行政家・思想家。日本及び東洋の文化の優秀性を内外に訴えた。著に『茶の本』『東洋の理想』『日本の覚醒』がある。(2006)(2010)(2014)
- ・横山大観(1868~1958):日本画家。岡倉天心・橋本雅邦に師事し、日本美術院の創立に参加。天心没後は再興日本美術院を主宰。文化勲章受章。(2014)
- ・竹内栖鳳(たけうちせいほう)(1864~1942):戦前の日本画家。第1回文化勲章受章者。動物を描けば、その匂いまで描くといわれた達人であった。(2014)
- ・池田遙邨(いけだようそん)(1895~1988):倉敷市出身の日本画家。本名は池田昇一。(2014)
- ・西村五雲(にしむらごうん)(1877~1938):京都出身の日本画家。動物の生態を生き生きと捉える絵を描き、平和でのどかな動物画を得意としていた。(2014)

●三筆(9世紀)

- ・空海
- ・橘逸勢
- ・嵯峨天皇

●三蹟(10世紀)

- ・小野道風(2009)
- ・藤原佐理
- ・藤原行成

●室町時代に活動した水墨画家

- ・明兆(2008)
- ・如拙(2009)
- ・周文
- ・雪舟(2008)

●仏像

- ・空也上人像(くうやしやうにんぞう):空也の彫像は、六波羅蜜寺が所蔵する立像(運慶の四男 康勝の作)が、最も有名である。(2014)
- ・僧形八幡神像(そうぎやうはちまんしんぞう):薬師寺蔵の同神像(9世紀末)、および東大寺蔵の快慶作坐像(1201)が代表作例。(2009)(2014)
- ・蘭溪道隆像(らんけいどうりゅうぞう):朗然居士(ろうねんこじ)(北条時宗の居士名か?)のために描かれたもの。(2014)
- ・平清盛坐像(たいらのきよもりぎぞう):京都市東山区の六波羅蜜寺蔵。重要文化財。(2014)

●学者・文人

- ・阿倍仲麻呂:奈良初期留学生として入唐。帰国途上で暴風雨に遭い、帰国を断念。唐に留まり玄宗皇帝に仕えた。
- ・菅原道真:平安前期の公卿・学者。894年遣唐使の廃止を建議し認められた。のち、讒言により大宰府に左遷。(2009)(2010)
- ・一条兼良:室町中期の政治家・学者。関白太政大臣。有職故実(ゆうそくこじつ)・古典に通じた当代随一の学者。(2014)
- ・北畠親房:南北朝時代の公家・武将・学者。後醍醐天皇に仕え、建武政権成立後、東北経営にあたった。「神皇正統記」を著した。(2008)(2014)
- ・ト部兼方(うらべかねかた):鎌倉中期の古典学者。ト部家は、もと神祇官(じんぎかん)の下級官僚家の一つであったが、しだいにその地位を固め、また古典伝承の家としても知られていた。(2014)
- ・千利休:戦国時代から安土桃山時代にかけての商人、茶人。わび茶の完成者として知られ、茶聖とも称せられる。(2009)

- ・藤原惺窩:戦国時代から江戸時代前期にかけての儒学者。近世儒学の祖。(2008)
- ・契沖:江戸時代前期の国学者。真言宗の僧。徳川光圀(みつくに)の依頼で「万葉集」を注釈し、「万葉代匠記」をあらわす。(2013)(2014)
- ・山鹿素行:江戸時代前期の兵法家、儒者。著作に「配所残筆」「武家事紀」など。(2014)
- ・熊沢蕃山:江戸前期の儒学者。中江藤樹に陽明学を学び、岡山藩主池田光政に仕えた。「大学或問(わくもん)」を著した。(2014)
- ・林羅山:江戸前期の朱子学者。上野忍岡に家塾を開く。(2008)
- ・新井白石:江戸中期の儒者・政治家。6・7代将軍の下で「正徳の治」を行う。著書に「読史余論」「西洋紀聞」など。(2007)(2010)(2011)(2014)
- ・荻生徂徠:江戸中期の儒者。古文辞学(古学一派)の祖。江戸に・園塾を開く。著書は「政談」など。
- ・前野良沢:江戸中期の蘭医。蘭語の解剖書「ターヘル・アナトミア」を杉田玄白らと共に翻訳、「解体新書」として刊行。(2009) (2016)
- ・杉田玄白:江戸中期の蘭医。「ターヘル・アナトミア」翻訳の苦労を記した「蘭学事始」はつとに知られる。(2009)(2010)(2016)
- ・青木昆陽:江戸時代中期の儒学者、蘭学者。(2009)
- ・大槻玄沢:一関藩出身の江戸時代後期の蘭学者。「解体新書」の翻訳で有名な杉田玄白・前野良沢の弟子。著書「蘭学階梯」(蘭学の入門書)(2009)
- ・稲村三伯:(2009)
- ・本居宣長:江戸中期の国学者。「古事記伝」などを著し、儒教・仏教を排して「もののあはれ」・「古道」を賞揚した。(2010)(2011)
- ・高野長英:江戸後期の蘭学者。長崎でシーボルトに学ぶ。1839年「蛮社の獄」で渡辺崋山らとともに弾圧される。(2012)
- ・吉田松陰:1854年ペリー来航の際海外密航を企て幽閉。松下村塾から優秀な人材を輩出するも、安政の大獄で斬首。
- ・岡倉天心:東京美術学校の設立(2010)
- ・小山内薫:自由劇場の結成(2010)
- ・辰野金吾:東京駅の設計(2010)
- ・黒田清輝:白馬会の結成(2010)
- ・浅井忠:明治美術会を設立(2010)
- ・福澤諭吉:日本の武士、蘭学者、著述家、啓蒙思想家、教育者。慶應義塾の創設者。著書「学問のすすめ」(2008)(2010)(2011)
- ・中江兆民:思想家、ジャーナリスト、政治家。フランスの思想家ジャン＝ジャック・ルソーを日本へ紹介して自由民権運動の理論的指導者となった。東洋のルソーと評される。(2008)
- ・吉野作造:明治・大正の政治学者。彼が提唱した「民本主義」は大正デモクラシーの理論的支柱となった。(2010)
- ・朝永振一郎:物理学者。東京の生まれ。東京教育大学学長。量子電磁力学の発展に寄与し、昭和40年(1965)ノーベル物理学賞受賞。同27年には文化勲章受章。(2014)
- ・江崎玲於奈:物理学者。筑波大学学長。大阪の生まれ。昭和32年(1957)エサキダイオードを発明。昭和48年(1973)、半導体の研究でノーベル物理学賞受賞。翌年、文化勲章受章。(2014)

●実業家

- ・角倉了以(すみのくらりょうい)(1554～1614):戦国期の京都の豪商。朱印船貿易の開始とともに安南国との貿易を行い、山城(京都)の大堰川、高瀬川を私財を投じて開削した。(2012)
- ・茶屋四郎次郎:安土桃山時代から江戸時代にかけての公儀呉服師を世襲した京都の豪商。(2013)
- ・高田屋嘉兵衛(1769～1827):江戸時代後期の廻船業者、海商である。ゴローニン事件でカムチャツカに連行されるが、日露交渉の間に立ち、事件解決へ導いた。(2013)

●歌人

- ・藤原定家:平安末期・鎌倉初期の歌人・歌学者。「新古今和歌集」(共撰)、「新勅撰和歌集」を撰した。歌論書「近代秀歌」「毎月抄」、撰集「小倉百人一首」、日記「明月記など」。(2011)(2014)
- ・藤原家隆:鎌倉初期の歌人。和歌を俊成に学び、抒情清艶な歌風で、定家とともに後鳥羽院歌壇の主要歌

人。「新古今和歌集」撰者の一人。(2011)(2014)

- ・松尾芭蕉:江戸前期の俳人。その句の多くは「俳諧七部集」に収められている。紀行に「野ざらし紀行」「笈(おい)の小文」「奥の細道」「更科紀行」、日記に「嵯峨日記」など。(2007)(2009)(2011)(2014)
- ・与謝野蕪村:蕪村句集(2007)
- ・正岡子規:俳人、歌人、国語学研究者。俳句、短歌、新体詩、小説、評論、随筆など多方面に亘り創作活動を行い、日本の近代文学に多大な影響を及ぼした。(2008)
- ・与謝野晶子:歌人、作家、思想家。「みだれ髪」(2009)(2007)

●歌集

- ・懐風藻:現存する最古の日本漢詩集。(2009)
- ・万葉集:7世紀後半から8世紀後半ころにかけて編まれた日本に現存する最古の和歌集である。さまざまな身分の人間が詠んだ歌を4500首以上も集めたもので、成立は759年以後とみられる。(2009)
- ・古今和歌集:醍醐天皇の詔により撰ばれた最初の勅撰和歌集。歌数は1111首。(2006)(2011)(2014)(2015)
- ・後撰和歌集:略称<後撰集>。<古今和歌集>をつぐ平安時代第2の勅撰和歌集。(2014)
- ・拾遺和歌集:<三代集>の一つとして第3番目の勅撰和歌集。(2014)
- ・三代集:平安初期の三つの勅撰和歌集、<古今和歌集><後撰和歌集><拾遺和歌集>をいう。勅撰集の最初の3集として重んぜられ、編集その他、後の模範とされた。三代とは撰集を命じた醍醐・村上・花山天皇の時代の意。
- ・後拾遺和歌集:第四番目の勅撰和歌集。白河法皇下命、藤原通俊撰。女流歌人の歌が多く、また叙景歌に新しい方向が示されている。(2014)
- ・山家集:平安末期の歌僧西行法師の家集。(2008)(2011)
- ・新古今和歌集:後鳥羽院の命によって編纂された勅撰和歌集。(2011)
- ・金槐和歌集:鎌倉時代前期の私家集。源実朝著。(2008)(2010)
- ・みだれ髪:与謝野晶子作の処女歌集。(2008)(2009)(2010)

●歴史書

- ・古事記:日本最古の歴史書である。712年に太安万侶が編纂し元明天皇に献上された。(2015)
- ・日本書紀:奈良時代に成立した日本の歴史書。日本に伝存する最古の正史で、六国史の第一にあたる。舎人親王らの撰で、養老4年に完成した。神代から持統天皇の時代までを扱う。(2009)
- ・風土記:一般には地方の歴史や文物を記した地誌のことをさすが、狭義には、日本の奈良時代に地方の文化風土や地勢等を国ごとに記録編纂して、天皇に献上させた報告書をさす。(2009)
- ・愚管抄:鎌倉時代初期の史論書。作者は天台宗僧侶の慈円。(2010)
- ・吾妻鏡:鎌倉時代に成立した日本の歴史書。鎌倉幕府の初代将軍・源頼朝から第6代将軍・宗尊親王まで6代の将軍記という構成。(2007)(2011)(2012)(2013)

●四鏡(しきょう)

平安時代後期から室町時代前期までに成立した「鏡物(かがみもの)」と呼ばれる4つの歴史物語(歴史書)。

- ・大鏡:(2007)(2012)
- ・今鏡:(2012)
- ・水鏡:(2012)(2013)
- ・増鏡:(2012)(2013)

●日記・紀行

- ・土佐日記:紀貫之(2015)
- ・蜻蛉日記:藤原道の母(2010)
- ・和泉式部日記:和泉式部(2010)
- ・更級日記:菅原孝標の女(2010)
- ・十六夜日記:阿仏尼(2010)(2011)
- ・笈の小文:松尾芭蕉(2011)

●物語

- ・竹取物語:(2011) (2015)
- ・源氏物語:紫式部(2009) (2015)
- ・平家物語:(2009)
- ・伊勢物語:(2011)
- ・宇津保物語:(2011)
- ・大和物語:(2011)
- ・落窪物語:(2011)

●随筆

- ・枕草子:清少納言(2009)
- ・方丈記:鴨長明(2009)(2010)(2013)
- ・徒然草:吉田兼好(2009)(2010)

●小説家

- ・井原西鶴:江戸時代前期の俳人、浮世草子作者。「好色五人女」「好色一代女」、武家物「武道伝来記」、町人物「日本永代蔵」「世間胸算用」。(2011)(2013)(2014)
- ・近松門左衛門:江戸中期の浄瑠璃・歌舞伎作者。坂田藤十郎のために脚本を書き、その名演技と相まって上方歌舞伎の全盛を招いた。代表作「国性爺合戦」「曾根崎心中」「心中天網島」。(2008)(2011)(2012)(2013)
- ・島崎藤村:若菜集、破戒(2010)
- ・坪内逍遙:小説神髓(2008)
- ・幸田露伴:五重塔(2010)
- ・高野聖:泉鏡花(2011)
- ・長塚節:土(2011)
- ・芥川龍之介:羅生門(2011)
- ・小林多喜:蟹工船(2011)
- ・有島武郎:或る女(2011)
- ・谷崎潤一郎:痴人の愛、細雪(2014)
- ・志賀直哉:暗夜行路(2011)
- ・森鷗外:舞姫(2009)
- ・尾崎紅葉:金色夜叉(2008)(2009)
- ・二葉亭四迷:浮雲(2008)
- ・樋口一葉:たけくらべ、にごりえ(2008)(2009)

●日本と世界との関わり

- ・日米和親条約(1854):老中阿部正弘とアメリカのペリーとの間で締結された条約。神奈川条約とも呼ばれる。(2009)(2010)
- ・日米修好通商条約(1858):江戸幕府が米国総領事ハリスとの間に調印した条約。
- ・下関条約(1895):日清戦争の講和条約。日本全権伊藤博文・陸奥宗光と清国全権李鴻章が下関で調印。(2008)(2011)
- ・日英同盟(1902):桂内閣の時に締結された、ロシアの南下策に対するイギリスとの同盟。(2011)
- ・日清戦争(1894~95):朝鮮の支配権をめぐる日清両国の戦争。日本の勝利に終わり、下関で講和条約が締結された。
- ・日露戦争(1904~05):満州をめぐる日露両国の戦争は、日本の勝利に終わった。
- ・ポーツマス条約(1905):アメリカのポーツマスで調印した日露戦争の講和条約。(2008)(2009)
- ・サンフランシスコ平和条約(1951):日本と連合 48 カ国との間に結ばれた第 2 次世界大戦終結のための講和条約。日本全権は吉田茂。翌年、日本は主権を回復した。

●日本に関係の深い外国人

- ・朝鮮通信使:李氏朝鮮の国王が日本国王(日本の外交権者)に国書を手交するために派遣した使節。日本では朝鮮来聘(らいへい)使とも呼ぶ。(2014)

- ・鑑真(688～763):唐の僧。日本の律宗の祖。8世紀中頃に來朝、東大寺に戒壇を設け聖武上皇以下に授戒。唐招提寺を創建。(過去3回以上出題された)
- ・ザビエル(1506～1552):1549年鹿児島に來日。のち平戸、山口で伝道し、日本で最初のキリスト教(カトリック)伝道者となる。(2008)
- ・フロイス(1532～1597):16世紀半ばにイエズス会宣教師として來日。信長、秀吉と親交を深める。名著「日本史」を残した。(2006)(2013)
- ・ヴァリニャーニ(1539～1606):安土桃山時代から江戸時代初期の日本を訪れたイエズス会員、カトリック教会の司祭。(2008)(2011)(2013)
- ・オルガンティーノ(1533～1609):戦国時代末期の日本で宣教活動を行ったイタリア人宣教師。カトリック司祭。イエズス会員。織田信長や豊臣秀吉などの時の権力者とも知己となり、激動の戦国時代の目撃者となった。(2008)
- ・マテオ・リッチ(1552～1610):イタリア人イエズス会員・カトリック教会の司祭。中国にヨーロッパの最新技術を伝えると共に、ヨーロッパに中国文化を紹介し、東西文化の架け橋となった。:(2008)
- ・ウィリアム・アダムズ(1564～1620):江戸時代初期に徳川家康に外交顧問として仕えたイングランド人航海士・水先案内人・貿易家。三浦按針(みうら あんじん)の日本名でも知られる。(2010)
- ・ケンペル(1651～1716):ドイツ人の医師、博物学者。ヨーロッパにおいて日本を初めて体系的に記述した『日本誌』の原著者。(2011)
- ・シドッチ(1668～1714):イタリア人イエズス会の宣教師で、1708年に屋久島に上陸したが捕らえられ、江戸に送られ5年後に亡くなる。(2011)(2013)
- ・レザノフ(1764～1807):ロシアの実業家。1804年に通商を開くため遣日使節として長崎に來航したが幕府に拒絶され、報復として樺太(からふと)・択捉(えとろふ)などを攻撃した。(2010)(2014)
- ・ラスクマン(1766～1806):ロシア最初の遣日使節として、1792年にエカテリーナ号でオホーツクを出発し根室に到着した。(2010)(2013)(2015)
- ・クルーゼンシュテルン(1770～1846):ロシアの軍人。日本への使節レザノフをのせた世界周航艦隊を指揮して、1803年に長崎につく。通商交渉を幕府に拒否されたのち、日本海を北上、北海道、千島などの沿岸を測量。(2014)
- ・ゴローニン(1776～1831):ロシア帝国(ロマノフ朝)の海軍軍人、探検家、学者。(2010)
- ・ビッドル(1783～1848):フィラデルフィアの名門出身のアメリカ海軍の士官。1846年には東インド艦隊の司令官として日本開国を試みるが失敗した。(2011)(2014)
- ・シーボルト(1796～1866):19世紀前期に來日、長崎郊外に鳴滝塾を開き医学などを教える。1828年シーボルト事件により国外追放。(2007)(2011)(2013)(2016)
- ・ペリー(1794～1858):アメリカ海軍軍人。東インド艦隊司令官として、1853年7月8日、フィルモア大統領の將軍あて書簡をたずさえ、軍艦4隻で江戸湾に到着、威圧的に開港を迫り、翌年再び江戸へ来て日米和親条約を締結した。(2009)(2010)
- ・プチャーチン(1803～1883):ロシアの提督、政治家。海軍兵学校の出身。1842年カスピ海におけるロシアの権益を守るためイランに派遣された。(2014)
- ・ハリス(1804～1878):初代駐日米総領事として下田に着任。1858年日米修好通商条約の締結に成功する。(2010)
- ・ヘボン(1815～1911):アメリカ人宣教師。1859年來日。ヘボン式ローマ字を考案し、「英和学院」(現明治学院大学)を開いた。(過去3回以上出題された)
- ・シュタイン(1815～1890):ドイツの法学者・思想家。伊藤博文にドイツ式の立憲体制を薦めて、大日本帝国憲法制定のきっかけを与えた人物(2011)
- ・グナイスト(1816～1895):プロイセン時代のドイツの法学者で政治家。伊藤博文、伊東巳代治ら日本の憲法調査団にドイツ国法学を講義し、明治憲法にも影響を及ぼした。(2011)
- ・フォンタネージ(1818～1882):イタリアの画家。明治9年(1876)來日、工部美術学校教授となり、浅井忠(あさいちゅう)・小山正太郎などを指導。(2014)(2013)
- ・ボアソナード(1825～1910):フランスの法学者で、幕末に締結された不平等条約による治外法権に代表される不平等条項の撤廃のため、日本の国内法の整備に大きな貢献を果たし、「日本近代法の父」と呼ばれている。(2011)(2012)
- ・ウィリアム・クラーク(1826～1886):アメリカ合衆国の教育者。化学、植物学、動物学の教師。農学教育のリーダー。札幌農学校初代教頭。(2012)(2016)

- ・**ポンペ(1829～1908)**:幕末に来日したオランダの海軍軍医。日本が系統的な西洋医学を導入するのに大きな役割を果たした。(2014)
- ・**フルベッキ(1830～1898)**:オランダ出身で、アメリカ合衆国に移住し、日本に宣教師として派遣され活躍した法学者・神学者、宣教師。(2011)(2013)
- ・**モース(1838～1925)**:明治初期に来日、動物学を講じた。大森貝塚を発掘し日本の考古学の祖となる。著書「日本その日その日」。(2012)(2013)
- ・**ラダール(1841～1927)**:明治期に来日し、日本に近代洋風彫刻を紹介、指導したイタリア人彫刻家。(2010)(2014)
- ・**モッセ(1846～1925)**:ドイツの法律家でお雇い外国人として日本に招かれた一人。「明治憲法の父」といわれる。(2011)
- ・**キヨソネ(1832～1898)**:イタリアの銅版画家。大蔵省紙幣寮で各種紙幣・郵便切手などを製作。日本における印刷術の基礎づくりに貢献。明治天皇・西郷隆盛・大久保利通などの肖像もかいた。(2013)(2014)(2013)
- ・**クロバトキン(1848～1925)**:帝政ロシアの軍人。陸軍大臣、日露戦争時のロシア満州軍総司令官を歴任した。(2010)
- ・**ヴィッテ (1849～1915)**:帝政ロシア末期の政治家。(2010)
- ・**ラフカディオ・ハーン(1850～1904)**:明治中期に来日、帰化して小泉八雲となる。著書に「怪談」「神国日本」「人生と文学」など。(出題多数)
- ・**ジョサイア・コンドル(1852～1920)**:イギリスのロンドン出身の建築家。お雇い外国人として来日し、政府関連の建物の設計を手がけた。(2006)(2010)(2014)
- ・**フェノロサ(1853～1908)**:明治初期に来日、日本の伝統美術の復興に尽力し、岡倉天心とともに東京美術学校を創立した。(2006)(2010)(2011)(2013)(2014)(2016)

●外国船に関わる事件

- ・**アロー号事件(1856～1860)**:清とイギリス・フランス連合軍との間で起こった戦争。最終的に北京条約で終結し、清の半植民地化が決定的なものとなった。(2009)
- ・**フェートン号事件(1808)**:鎖国体制下の日本の長崎港で起きたイギリス軍艦侵入事件。(2009)
- ・**モリソン号事件(1837)**:日本人漂流民を乗せたアメリカ合衆国の商船を日本側砲台が砲撃した事件。(2009)
- ・**ノルマントン号事件(1886)**:イギリス船籍の貨物船ノルマントン号が、紀州沖で座礁沈没した事から始まった紛争事件。(2009)
- ・**サン＝フェリペ号事件(1596)**:土佐にスペインのサン＝フェリペ号が漂着した事件。豊臣秀吉の唯一のキリスト教徒への直接的迫害(日本二十六聖人殉教)のきっかけとなったとされる。(2009)

●教育機関

- ・**綜芸種智院**:空海が庶民教育や各種学芸の総合的教育を目的に、京都の左京九条に設置した私立学校。(空海)(2012)
- ・**鳴滝塾(長崎県)(1824)**:シーボルトが長崎郊外に設けた私塾。診療所も兼ねていた。(2007)(2011)(2013)
- ・**松下村塾**:幕末に、長州萩城下の松本村に吉田松陰が指導した私塾。塾生の中から、幕末より明治期の日本を主導した人材を多く輩出したことで知られる。(2007)
- ・**適塾**:蘭学者・医者として知られる緒方洪庵が江戸時代後期に大坂・船場に開いた蘭学の私塾。(2007)
- ・**古義堂**:江戸時代の1662年、京都に、伊藤仁斎がその生家で開いた儒学を教える家塾。(2007)

●重要施設

- ・**八幡製鉄所**:明治34年(1901)日本初の銑鋼一貫操業を開始した官営製鉄所。(2006)(2012)(2014)
- ・**横須賀造船所**:江戸幕府により横須賀市に開設された造船所。江戸開城後は明治政府が引き継ぎ、のちに海軍省の管轄となる。現在は在日米軍横須賀海軍施設となっている。(2012)
- ・**三池炭鉱(福岡県)**:日本の近代化を支えてきた炭鉱であったが1997年に閉山した。2015年7月に世界文化遺産として登録された。(2006)
- ・**富岡製糸場**:日本初の本格的な製糸工場。「富岡製糸場と絹産業遺産群」として、2014年6月に世界文化遺産として登録された。(2006)
- ・**長崎造船所**:長崎県長崎市と諫早市にある三菱重工業の造船所・工場。「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として、2014年6月に世界文化遺産として登録された。(2006)

- ・**東洋拓殖会社**: 日露戦争後の 1908 年に設立され、1945 年の第二次世界大戦の終結まで、京城府及び満州国、モンゴル、サハリン、南洋諸島、ミクロネシアに存在した大日本帝国の特殊会社。(2006)

●重要名数

- ・**三筆**: 嵯峨天皇、橘逸勢、空海(弘仁・貞観文化)(平安時代初期)(唐様)
- ・**三蹟**: 小野道風、藤原佐理、藤原行成(国風文化)(平安時代中期)(和様)
- ・**三管領**: 斯波家、細川家、畠山家
- ・**御三家**: 尾張家、紀伊家、水戸家
- ・**御三卿**: 田安家、一橋家、清水家
- ・**江戸の三大改革**: 享保の改革(徳川吉宗)、寛政の改革(松平定信)、天保の改革(水野忠邦)
- ・**明治維新の三傑**: 西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允
- ・**国学四大人(うし)**: 荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤
- ・**四天王**: 持国天、広目天、増長天、多聞天
- ・**五街道**: 東海道、中山道、日光道中、奥州道中、甲州道中

●歴史用語

- ・**封建制度**: 中世社会の基本的な支配形態。封土の給与とその代償としての忠勤奉仕を基礎として成立する、領主・家臣の間の主従関係に基づく統治制度。また、領主が生産者である農民を身分的に支配する社会経済制度。もとは、Feudalism の訳語として、近・現代になって、中国語の「封建制」という言葉を援用・転用したもの。
- ・**得宗専制**: 鎌倉幕府において執権を務める北条氏の惣領である得宗(とくそう)に幕府権力が集中して専制政治が行われたこと、またその時期を指す。鎌倉幕府の歴史を 3 つに分けた場合、源氏将軍・執権政治に続く第 3 の時期にあたる。(2014)
- ・**荘園公領制**: 日本の中世における、荘園と公領(朝廷・国衙(こくが)・幕府などの領地)を土台とした、重層的な土地支配構造のことである。11 世紀中後期から 12 世紀初期にかけて成立し、院政期を通じて発展し、鎌倉時代前後に最盛期を迎えた。その一方で、鎌倉時代には地頭による侵食を受け、室町時代には守護(守護大名)によって蚕食されるなど、武士の進出に伴って次第に解体への道を進み、戦国時代頃までにはほぼ形骸化した。最終的には太閤検地で消滅する。
- ・**院政**: 上皇、法皇の執政を常態とする政治形態。律令政治が天皇と貴族の共同統治的官僚政治であり、摂関政治が上級官僚貴族の寡頭政治的色彩が強いのにに対し、白河上皇の専制的な権勢のもとに定着した政治形態を、後世の史家が院政と名付けたのである。(2014)(2011)

●博物館

- ・**東京国立博物館(1872)**: 日本最古の博物館。国宝 87 件、重要文化財 633 件を含む収蔵品の総数は 115,653 件ある。日本と東洋の文化財の収集保管、展示公開、調査研究、普及などを目的としている。(2014)
- ・**国立科学博物館(1877)**: 「自然科学及び社会教育の振興を図る」ことを目的とした博物館である。(2014)
- ・**奈良国立博物館(1895)**: 仏教美術を中心とした文化財の収集、保管、研究、展示を行う。毎年秋に実施される「正倉院展」の会場でもある。(2014)
- ・**京都国立博物館(1897)**: 主に平安時代から江戸時代にかけての京都の文化を中心とした文化財を、収集・保管・展示するとともに、文化財に関する研究、普及活動を行っている。(2014)
- ・**国立民族学博物館(1977)**: 民族学・文化人類学を中心とした研究・展示を行っている、博物館を持った研究所である。大阪府吹田市の万博記念公園にある。(2014)
- ・**九州国立博物館(2005)**: 福岡県太宰府市石坂にある歴史系の博物館。独立行政法人国立文化財機構が運営する博物館の 1 つで、太宰府天満宮裏の同宮所有の丘陵地に建設された。(2016)

日本と世界との関わりは、通訳案内士試験〈日本歴史〉の重要テーマである。詳細まで覚える必要はないが、大きな流れはしっかり押さえておく必要がある。

●南蛮貿易開始から鎖国を経て開国への流れ

<南蛮貿易の開始>

明朝中国は海禁政策をとっていたが、勘合貿易により日明間の貿易は行われていた。しかし、1549年(嘉靖28年)を最後に勘合貿易が途絶えると、両国間の貿易は密貿易のみとなってしまった。ここに登場したのがポルトガルであった。ポルトガルはトルデシヤス条約およびサラゴサ条約によってアジアへの進出・植民地化を進め、1511年にはマラッカを占領していたが、1557年にマカオに居留権を得て中国産品(特に絹)を安定的に入手できるようになった。ここからマカオを拠点として、日本・中国・ポルトガルの三国の商品が取引されるようになった。

徳川家康が政権を握ると、オランダ、イギリスに親書を送り、オランダは1609年、イギリスは1613年に平戸に商館を設立した。しかしながら、両国とも中国に拠点を持っているわけではなく、日本に輸出するものはあまりなかった。結果イギリスは1623年に日本を撤退、オランダの場合も、日本への進出は商業的というよりむしろ政治的な理由であった。なお、当時のスペインの関心はフィリピンとメキシコ間の貿易であり、1611年にセバステイアン・ビスカイノが使節として駿府の家康を訪れたが、貿易交渉は不調に終わっている。

<キリスト教の禁止>

ポルトガル船が来航するようになると、「物」だけではなくキリスト教も入ってきた。1549年のフランシスコ・ザビエルの日本来航以来、イベリア半島(スペインやポルトガル)の宣教師の熱心な布教によって、また戦国大名や徳川幕府下の藩主にもキリスト教を信奉する者が現れたため、キリスト教徒(当時の名称では「切支丹」)の数は九州を中心に広く拡大した。当時の権力者であった織田信長はこれを放任、豊臣秀吉も当初は黙認していたが、1587年にバテレン追放令を出し、1596年にサン＝フェリペ号事件が発生すると、切支丹に対する直接迫害が始まった(日本二十六聖人殉教事件)。

家康は当初貿易による利益を重視していたが、プロテスタント国家のオランダは「キリスト教布教を伴わない貿易も可能」と主張していたため、家康にとって積極的に宣教師やキリスト教を保護する理由はなくなった。また、1612年の岡本大八事件をきっかけに、諸大名と幕臣へのキリスト教の禁止を通達、翌1613年に、キリスト教信仰の禁止が明文化された。また、国内のキリスト教徒の増加と団結は徳川將軍家にとっても脅威となり、締め付けを凶ることとなったと考えるのも一般的である。

当時海外布教を積極的に行っていたキリスト教勢力は、キリスト教の中でも専らカトリック教会であり、その動機として、宗教改革に端を発するプロテスタント勢力の伸張により、ヨーロッパ本土で旗色の悪くなっていたカトリックが海外に活路を求めざるを得なかったという背景がある。一方、通商による実利に重きを置いていたプロテスタント勢力にはそのような宗教的な動機は薄く、特に当時、スペインからの独立戦争(八十年戦争)の只中にあったオランダは、自身が直近までカトリックのスペインによる専制的支配と宗教的迫害を受け続けたという歴史的経緯から、カトリックに対する敵対意識がとりわけ強かったことも、徳川幕府に対して協力的であった理由と言える。

とは言うものの、中国に拠点を持たないオランダやイギリスが直ちにポルトガルの代替にならない以上、ポルトガルとの交易は続けざるを得なかった。

なお、キリスト教に関しては、単に国内で禁止するだけでなく、海外のスペイン・ポルトガルの根拠地を攻撃する計画もあった。当時オランダ商館の次席であったフランソワ・カロンは1637年9月、長崎奉行榊原職直に対して、日蘭が同盟してマカオ、マニラ、基隆を攻撃することを提案した。その後まもなく長崎代官の末次茂貞は、商館長のニコラス・クーケバックルに対し、翌年にフィリピンを攻撃するため、オランダ艦隊による護衛を要請している。しかし、この計画は翌年の島原の乱で立ち消えとなった。

<島原の乱>

徳川幕府が鎖国に踏み切った決定的な事件は、1637年(寛永14年)に起こった島原の乱である。この乱により、キリスト教は徳川幕府を揺るがす元凶と考え、新たな布教活動が今後一切行われることのないようイベリア

半島勢力を排除した。ポルトガルは 1636 年以降出島でのみの交易が許されていたが、1639 年にポルトガルが追放されると出島は空き地となっていた。1641 年、平戸のオランダ商館倉庫に「西暦」が彫られているという些細な理由で、オランダは倉庫を破却し平戸から出島に移ることを強制された(ポルトガルは出島使用料を年額銀 80 貫払っていたが、オランダは 55 貫にまけさせている)。また、徳川幕府に対して布教を一切しないことを約束した。

しかし、島原の乱からポルトガル追放までは 2 年の間がある。これはオランダがポルトガルに代わって中国製品(特に絹と薬)を手に入れる保証がなかったことと、日本の商人がポルトガル商人にかなりの金を貸しており、直ちにポルトガル人を追放するとその回収ができなくなるのが理由であった。

<貿易の管理>

戦国時代から江戸初期にかけて、国内各地で大量に金と銀(特に銀)を産出していたため、交易においてもその潤沢な金銀を用いた。他方、江戸初期においては特に輸出するものもなく圧倒的に輸入超過であり、徐々に金銀が流出していった。このため、幕府は 1604 年に糸割符制度を設けて絹の価格コントロールを試みた。17 世紀も後半になると金銀の産出量が減り、このため 1685 年には貿易量を制限するための定高貿易法が定められ管理貿易に移行した。

また現代的視点では、長崎の出島・堺を始めとした有力港湾を徳川幕府の直轄領(天領)、若しくは親藩・譜代大名領に組み入れることによって、徳川幕府による管理貿易を行い収益を独占した、という研究がある[要出典]。しかし、幕府は藩の直接的な貿易を禁止したが、幕府自身も直接的な貿易を行っているわけではなく、また「鎖国」成立当初において幕府が長崎貿易から利潤を得ていたわけでもない。貿易の管理・統制については、貿易都市長崎および商人を通して間接的に行っていた。

<鎖国完成まで>

「鎖国」体制は、第 2 代將軍秀忠の治世に始まり、第 3 代將軍家光の治世に完成した。

1612 年(慶長 17 年)幕領に禁教令

1616 年(元和 2 年)明朝以外の船の入港を長崎・平戸に限定する。

1623 年(元和 9 年)イギリス、業績不振のため平戸商館を閉鎖。

1624 年(寛永元年)スペインとの国交を断絶、来航を禁止。

1628 年(寛永 5 年)タイオワン事件の影響で、オランダとの交易が 4 年間途絶える。

1631 年(寛永 8 年)奉書船制度の開始。朱印船に朱印状以外に老中の奉書が必要となった。

1633 年(寛永 10 年)第 1 次鎖国令。奉書船以外の渡航を禁じる。また、海外に 5 年以上居留する日本人の帰国を禁じた。

1634 年(寛永 11 年)第 2 次鎖国令。第 1 次鎖国令の再通達。長崎に出島の建設を開始。

1635 年(寛永 12 年)第 3 次鎖国令。中国・オランダなど外国船の入港を長崎のみに限定。東南アジア方面への日本人の渡航及び日本人の帰国を禁じた。

1636 年(寛永 13 年)第 4 次鎖国令。貿易に関係のないポルトガル人とその妻子(日本人との混血児含む)287 人をマカオへ追放、残りのポルトガル人を出島に移す。

1637 年～1638 年(寛永 14 年～15 年)島原の乱。幕府に武器弾薬をオランダが援助。

1639 年(寛永 16 年)第 5 次鎖国令。ポルトガル船の入港を禁止。それに先立ち幕府はポルトガルに代わりオランダが必需品を提供できるかを確認している。

1640 年(寛永 17 年)マカオから通商再開依頼のためポルトガル船来航。徳川幕府、使者 61 名を処刑。

1641 年(寛永 18 年)オランダ商館を平戸から出島に移す。

1643 年(寛永 20 年)ブレスケンス号事件。オランダ船は日本中どこに入港しても良いとの徳川家康の朱印状が否定される。

1644 年(正保元年)中国にて明が滅亡し、満州の清が李自成の順を撃破して中国本土に進出。明再興を目指す勢力が日本に支援を求めるが、徳川幕府は拒絶を続けた。

1647 年(正保 4 年)ポルトガル船 2 隻、国交回復依頼に来航。徳川幕府は再びこれを拒否。以後、ポルトガル船の来航が絶える。

1673 年(延宝元年)リターン号事件。イギリスとの交易の再開を拒否。以降 100 年以上、オランダ以外のヨーロッパ船の来航が途絶える。

鎖国実施以前から、幕府は貿易の管理を試みていた。1604年には糸割符制度を導入し、生糸の価格統制を行った。糸割符は1655年に廃止され、長崎では相対売買仕方による一種の自由貿易が認められて貿易量は増大したが、1672年に貨物市法を制定して金銀流出の抑制を図り、さらに1685年には定高貿易法により、金・銀による貿易決済の年間取引額を、清国船は年間銀6000貫目・オランダ船は年間銀3000貫目に限定した。のちに、これを超える積荷については、銅・俵物・諸色との物々交換による決済(代物替)を条件に交易を許すようになったが、1715年の海舶互市新例により代物替が原則とされた。また、定高は1742年と1790年の2回にわたり引き下げられたため、代物替による交易が中心となっていった。

いわゆる「鎖国」政策は、徳川幕府の法令の中では徹底された部類ではあったが、特例として認められていた松前藩、対馬藩や薩摩藩では、徳川幕府の許容以上の額を密貿易(抜け荷)として行い、それ以外の領内を大洋に接する諸藩も密貿易をたびたび行っていた。これに対して、新井白石や徳川吉宗ら歴代の幕府首脳はこうした動きにたびたび禁令を発して取締りを強めてきたが、財政難に悩む諸藩による密貿易は続けられていた。中には、石見浜田藩のように、藩ぐるみで密貿易に関わった上に、自藩の船団を仕立てて東南アジアにまで派遣していた例もあった(竹島事件)。

<開国までの動きと鎖国の終焉>

18世紀後半から19世紀中頃にかけて、ロシア帝国、イギリス、フランス、アメリカ合衆国などの艦船が日本に來航し、交渉を行ったが、その多くは拒否された。しかし、1853年7月8日には浦賀へアメリカのマシュー・ペリー率いる黒船が來航し、翌1854年3月31日には日米和親条約が締結され、終に開国に至った。その後、日米修好通商条約(1858年)を初めとする不平等条約が続々と締結され、「鎖国」は崩壊したのである。

1778年(安永7年)ヤクーツクの商人パベル・レベデフ＝ラストチキンが蝦夷厚岸に到着。松前藩に、交易を求めたが拒否された。幕府には報告されず。

1787年(天明7年)ラ・ペルーズ伯ジャン＝フランソワ・ド・ガローが日本近海を航海、千島列島、琉球列島を探検した。宗谷海峡の国際名称ラ・ペルーズ海峡は、彼にちなんだものである。

1791年(寛政3年)米国の探検家ジョン・ケンドリックが2隻の船と共に紀伊大島に到着、11日間滞在した。日本を訪れた最初の米国人。ロシアによる開国要求

1792年(寛政4年)アダム・ラクスマンが大黒屋光太夫ら3名を連れて根室に上陸、通商交渉を求めも徳川幕府は拒否。しかし、長崎への入港許可証である信牌を与えた。

1804年(文化元年)9月、アダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルンが率いたロシアの世界一周遠征隊が津太夫ら4名を連れ、信牌を持って長崎に來航。特使ニコライ・レザノフが交易を求め、翌年春まで幕府と交渉するものの最終的に拒否される。

1806年(文化3年)「文化の薪水給与令」が出される。

1806年(文化3年)～1807年(文化4年)レザノフの部下であるフヴォストフが樺太の久春古丹や利尻島、択捉島の番屋を襲撃(フヴォストフ事件、文化露寇)、中川五郎治と佐兵衛がロシアに連行される。この事件は幕府が蝦夷地防衛に乗り出すきっかけとなり、日露間の緊張が高まった。薪水給与令は1年で取り消される。

1811年(文化8年)ヴァーシリー・ゴローニン大尉が国後島に上陸、捕らえられその後2年間抑留された(ゴローニン事件)。

1812年(文化9年)8月、ディアナ号が国後島に來航する。日露間で捕虜交換交渉が行われるが、日本側の捕虜である中川五郎治と歓喜丸漂流民6名が脱走したために交渉が決裂。帰途、ディアナ号艦長ピョートル・リコルド(ロシア語版)は報復として附近を航行していた歓世丸を襲撃、高田屋嘉兵衛を拘束し、翌年6月まで抑留する。

1813年(文化10年)9月、ディアナ号がゴローニンの解放交渉と日本人漂流民の久蔵の送還のために箱館に來航する。なおこの時、ロシアに帰化した善六がロシア側の通訳として使節に同行していた。

フランス革命戦争とナポレオン戦争の余波

1797年(寛政9年)から1809年(文化6年)にかけて、本国がフランスに占領されてしまったため、オランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフの依頼で数隻の米国船がオランダ国旗を掲げて出島での貿易を行った。

1808年(文化5年)オランダと敵対関係にあった英国の帆走フリゲート・フェートン号が、オランダ国旗を掲げ長崎に入港。フェートン号事件を起こす。その後も英国船出現が相次いだ。

1837年(天保8年)商船モリソン号が音吉を含む漂流民を日本に送り届けるために浦賀に來航したが、異国船打払令に基づき日本側砲台が砲撃した(モリソン号事件)。この事件後、幕府内部でも異国船打払令に対する批判が強まった。

1842年(天保13年)アヘン戦争における清朝の敗北による南京条約の締結に驚愕した徳川幕府は、政策を転換し、遭難した船に限り給与を認める天保の薪水給与令を発令した。

1844年(天保15年)フォニエル・デュブラン大佐が率いるフランス海軍の遠征隊が琉球王国に来航、通商を求めるが拒否された。しかし、テオドール・フォルカード神父と通訳が那覇に残った。

1844年8月14日(弘化元年7月2日)オランダ軍艦パレンバン号がオランダ国王ウィレム2世の将軍宛の親書を携えていた長崎に入港。この親書はシーボルトの起草によるもので、開国を求めたが幕府はこれを拒否した。

1845年(弘化2年)捕鯨船マンハッタン号が、22人の日本人漂流民を救助し、マーケイター・クーパー船長は浦賀への入港を許可され、浦賀奉行と対面した。

1846年7月20日(弘化3年閏5月27日)アメリカ東インド艦隊司令官ジェームズ・ビドル代将は戦列艦コロンバスおよび戦闘スloop・ビンセンスを率いて、開国交渉のために浦賀に入港した。しかし、条約の締結は浦賀奉行に拒否され、数日の滞在で退去した。

1846年7月24日(弘化3年6月2日)フランスのセシル提督が長崎に来航したが上陸を拒否された。このとき、那覇に留まっていたフォルカード神父を伴っていた。

1848年(弘化5年/嘉永元年)ラナルド・マクドナルドが、日本人に英語を教えたいと自らの意志で、遭難を装って利尻島に上陸した。その後長崎に送られ、崇福寺大悲庵に収監され、本国に送還されるまでの半年間の間、ここで通詞14人に英会話を教えた。帰国後は、日本の情報をアメリカ合衆国本土に伝えた。

1849年4月17日(嘉永2年3月27日)ジェームス・グリーン大尉が艦長を務める米国の帆走戦闘スloop・プレブル(USS Preble)が、アメリカ捕鯨船員を救出のため長崎に来航、軍事介入の可能性をほのめかしつつ、交渉を行った。結果、船員とラナルド・マクドナルドが解放された。帰国後、グリーンは米国政府に対し、日本を外交交渉によって開国させること、また必要であれば「強さ」を見せるべきとの建議を提出した。彼のこの提案は、マシュー・ペリーによる日本開国への道筋をつけることとなった。

1849年(嘉永2年)英国海軍のブリッグ・マリナー号が浦賀に来航し、地誌的調査を行った。マリナー号には音吉が通訳として乗艦していた。音吉は日本とのトラブルを避けるため、中国人であると偽っていた。

1853年(嘉永6年)マシュー・ペリー率いるアメリカ艦隊が来航。開国を要求した。蒸気船の来航はこのときが初めてであった。

1854年(嘉永7年/安政元年)ペリーが再来航し、日米和親条約を締結。下田と函館を開港し、鎖国が終わる。

1858年(安政5年)タウンゼント・ハリスと徳川幕府が日米修好通商条約を締結し、鎖国が完全に終わる。

なお、学問や商業目的の海外渡航が解禁されたのは1866年5月21日(慶応2年4月7日)のことであった。また、外国人の居住が自由になるのは、正式には内地雑居が認められる1899年(明治32年)7月16日である。

当初の「鎖国」の主目的であった「キリスト教の禁止」は、日米修好通商条約において居留地における教会建設と居留アメリカ人の信教の自由が認められたが、明治政府もしばらくは禁教政策を続けており、日本人に対する禁教が解かれたのは1873年(明治6年)であった。

●明治維新

<改革までの経緯>

明治維新は、黒船来航に象徴される欧米列強の経済的・軍事的進出に対する抵抗運動(攘夷運動)に起源を持つ。阿片戦争以後、東アジアで欧米による帝国主義の波が強まる中で、長年の国是であった鎖国体制を極力維持し、旧来の体制を維持しようとする思想が現れた。しかし江戸幕府は、朝廷の意に反する形で開国・通商路線を選択したため、攘夷運動は尊王論と結びつき、朝廷の権威のもと幕政改革と攘夷の実行を求める尊王攘夷運動として広く展開されることとなった。

一方、開国・通商路線を是認する諸藩の中にも、いわゆる雄藩を中心に、幕府による対外貿易の独占に反対し、あるいは欧米列強に対抗すべく旧来の幕藩体制の変革を訴える勢力が現れた。これらの勢力もまた朝廷を奉じてその要求を実現させようとしたため、幕末は京都を舞台に朝廷を巡る複雑な政争が展開されることとなった。尊王攘夷運動は、薩英戦争や下関戦争などにおいて欧米列強との軍事力の差が改めて認識されたことで、観念的な攘夷論を克服し、国内統一・体制改革(近代化)を優先して、外国との交易によって富国強兵を図り、欧米に対抗できる力をつけるべきだとする「大攘夷」論が台頭し、尊王攘夷運動の盟主的存在だった長州藩も開国論へと転向していくことになった。

幕府は、公武合体政策のもと朝廷の攘夷要求と妥協しつつ旧体制の存続を志向したため、次第に雄藩らの

離反を招いた。また、黒船来航以来の威信の凋落もあって国内の統合力を著しく低下させ、幕末は農民一揆が多発するようになった。このような情勢の中、諸侯連合政権を志向する土佐藩・越前藩らの主張（公議政体論）や、より寡頭的な政権を志向する薩摩藩の主張など、幕府を廃し、朝廷のもとに権力を一元化する国内改革構想が現れてくることとなる。また、それは旧弊な朝廷の抜本的な改革を伴う必要があった。結果として、この両者の協力により王政復古が行われ、戊辰戦争による旧幕府勢力の排除を経て権力を確立した新政府は、薩摩・長州両藩出身の官僚層を中心に急進的な近代化政策を推進していくこととなった。

<改革の時期>

開始時期については諸説あるが、狭義では明治改元に当たる明治元年旧9月8日(1868年10月23日)となる。しかし、一般的にはその前年にあたる慶応3年(1867年)の大政奉還、王政復古以降の改革を指すことが多い(維新体制が整う以前の政治状況については幕末の項で扱うものとする)。終了時期についても、廃藩置県の断行(明治4年、1872年)、西南戦争の終結(明治10年、1877年)、内閣制度の発足(明治18年、1885年)、立憲体制の確立(明治22年、1889年)までとするなど諸説ある。

この期間の政府を特に明治政府(めいじせいふ)、新政府(しんせいふ)、維新政府(いしんせいふ)などと呼称することが多い。「藩閥政府」と揶揄されることもあるが、中級官僚以上でも旧親藩・旧幕臣などから採用された者も少なくなく、一概に一部雄藩のみが主導したともいえない。当時の人々からは主に大政奉還と廃藩置県を指して御一新と呼ばれていた。

<五箇条の御誓文>

江戸幕府による大政奉還を受け、王政復古によって発足した明治新政府の方針は、天皇親政(旧来の幕府・摂関などの廃止)を基本とし、諸外国(主に欧米列強国を指す)に追いつくための改革を模索することであった。その方針は、翌慶応4年(1868年)3月14日に公布された五箇条の御誓文で具体的に明文化されることになる。合議体制、官民一体での国家形成、旧習の打破、世界列国と伍する実力の涵養などである。なお、この『五箇条の御誓文』の起草者・監修者は「旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」を全く新たに入れた総裁局顧問・木戸孝允(長州藩)であるが、その前段階の『会盟』五箇条の起草者は参与・福岡孝弟(土佐藩)であり、更にその前段階の『議事之体大意』五箇条の起草者は参与・由利公正(越前藩)である。

その当時はまだ戊辰戦争のさなかであり、新政府は日本統一後の国是を内外に呈示する必要があった。そのため、御誓文が、諸大名や、諸外国を意識して明治天皇が百官を率いて、皇祖神に誓いを立てるという形式で出されたのである。さらに国民に対しては、同日に天皇の御名で「億兆安撫国威宣揚の御宸翰」が告示され、天皇自身が今後善政をしき、大いに国威を輝かすので、国民も旧来の陋習から捨てるように説かれている。これらの内容は、新政府の内政や外交に反映されて具体化されていくとともに、思想的には自由民権運動の理想とされていく。

また、この目的を達するための具体的なスローガンとして「富国強兵」「殖産興業」が頻用された。

<改革の内容>

(1)岩倉使節団の影響

1871年12月23日から1873年9月13日にかけて[7]維新政府は不平等条約改正ならびに西洋の諸制度を研究するため岩倉具視を正使、大久保利通・木戸孝允・伊藤博文らを副使とする岩倉使節団を欧米へ派遣した。使節団は条約改正には失敗するものの、西洋の諸制度の研究・吸収には成功し、この後の維新の動きに大きな影響を与えた。一方、日本国内においては「留守政府」と呼ばれた日本残留組の西郷隆盛・井上馨・大隈重信・板垣退助・江藤新平・大木喬任らの手によって、次々と改革は進んでいった。このような改革には積極的に西洋文明の先進制度が取り入れられ、その過程で、「お雇い外国人」と呼ばれる外国人が、技術指導、教育分野、官制・軍制整備など様々な分野で雇用され、近代国家建設を助けた。

(2)改革された諸制度

留守政府が行った主な改革としては、学制改革、地租改正、徴兵令、グレゴリオ暦の採用、司法制度の整備、断髪令などがある。ただし、これらの改革は急激に行われたため矛盾も少なくなく、士族や農民の不満を招いたため、後の征韓論につながったとも言われる。欧米使節から帰国した岩倉や大久保が明治六年政変によって征韓論を退け、さらに大久保の下に内務省が設立されたことで諸改革の整理が行われることになる。ただし留守政府の行った改革のほとんどは政変後も存続し、明治維新の根幹の政策となっていた。

(3)軍隊

1930年代の海軍省徴兵令を導入し、近代的な常備軍を最初に作ろうとしたのは大村益次郎であったが、彼が暗殺されてしまったため、山縣有朋に引き継がれた。明治3年、徴兵規則がつくられ、翌年の明治4年に廃藩により兵部省が全国の軍事力を握ることとなり、明治5年には徴兵令が施行され、陸軍省と海軍省が設置される。こうして近代的な常備軍が創設された。

(4)身分制度

江戸幕府下の武士・百姓・町人(いわゆる士農工商)の別を廃止し、「四民平等」を謳った。しかし、明治4年に制定された戸籍法に基づき翌年に編纂された壬申戸籍では、旧武士階級を士族、それ以外を平民とし、旧公家・大名や一部僧侶などを新たに華族として特権的階級とすると同時に、宮内省の支配の下に置くことになった。

華族と士族には政府から家禄が与えられ、明治9年の秩禄処分まで支給された。同年、廃刀令が出され、これにより士族の特権はなくなり、のちの不平士族の反乱(佐賀の乱、萩の乱、秋月の乱、神風連の乱)につながる。しかしこれらの反乱はいずれもほどなくして鎮圧され、1877年に維新の元勳の一人である西郷隆盛が率いた最大の士族反乱であった西南戦争が鎮圧されると、士族による反乱は後を絶った。

(5)経済産業

維新を進めるに当たり、大きな問題となったのが税収の確保であった。それまでの年貢は収量を基本とする物納が基本であり、また各藩領において税率の不均衡があったことから、土地を基本とする新たな税制が構想された。1871年には田畑永代売買禁止令が廃止されて土地の売買が可能となり、さらに1874年に地租改正条例が布告されることで土地は私有となり、土地所有者に地券が発行されることとなり、所有する土地に対し地租が課せられることとなった。これにより、土地の所有権がはじめて法的に認められたことにより土地の売買や担保化が容易になり、私有財産権が完全に確立することで資本主義の発展の基礎条件が成立した。

富国強兵・殖産興業のスローガンの下、工部省(のちに内務省)が中心となり、政府主導の産業育成が始まる。富岡製糸場をはじめとする官営模範工場が作られるなど、西洋式工業技術が導入された。しかし西南戦争後の財政難のため、1880年には「官営工場払下概則」が制定され、造幣局や通信、軍事関係を除く官営工場や鉱山が民間に払い下げられていった。これによって民間の工業は大きく発展することとなり、1890年ごろから産業革命が進行し、工業化が進展していくこととなった。

金融制度でも旧幕府時代の貨幣制度を改めて、通貨単位として「円」を導入(明治4年(1871年)。新貨条例を参照)、また国立銀行条例による国立銀行(ナショナルバンク)を経て、通貨発行権を独占する中央銀行としての日本銀行設立(明治15年、1882年)など、資本主義的金融制度の整備も行われた。

流通分野では、1871年には前島密によって郵便制度が創設され、1872年には新橋駅から横浜駅間において日本初の鉄道が開通し、電信網の整備や船舶運輸(民間の郵便汽船三菱会社と国策会社の共同運輸会社の競合を経て日本郵船会社)などの整備も行われた。これらの資本活動には、職を失った代わりに秩禄を得た華族の資産による投資活動も背景にあった。

(6)思想

幕末から活発になっていた佐久間象山などの「倫理を中核とする実学」から「物理を中核とする実学」への転回が行われ[8]、横井小楠の実学から物理を中核とする福澤諭吉の文明論への転回といった思想史の転換が行われた。これに民間の知識人やジャーナリズムが連動し、文明開化の動きが加速する。

明治新政府は国民生活と思想の近代化もすすめ、具体的には、福澤諭吉・森有礼・西周・西村茂樹・加藤弘之らによる明六社の結成と『明六雑誌』、福沢諭吉の『学問のすすめ』や中村正直の『西国立志編』『自由之理』が刊行され、啓蒙活動が活発になった。また土佐藩の自由民権運動の動きと連動して中江兆民や植木枝盛、馬場辰猪といった革新的な勢力と、佐々木高行、元田永孚、井上毅、品川弥二郎といった官吏の保守的な勢力との対立が鮮明になってきた。

教育機関の整備では始めは大学寮をモデルにした「学舎制」案を玉松操・平田鐵胤・矢野玄道・渡辺重石丸らの神道学者に命じて起草させたが、大久保利通や木戸孝允の意向の下、明治中期からは方針を変えて近代的な教育機関の整備が行われるようになり、幕末以来の蘭学塾や漢学塾、それに幕府自身がつくった洋学教育機関である開成所や蕃書調所が直接の誘因となって、明治期の高等教育が発達した。

維新まで松前藩による支配下にあり開発の進んでいなかった北海道の開発にも明治政府は着手し、1869年にはそれまでの蝦夷地から北海道と改名し、同年開拓使が置かれて、積極的な開発が進められた。北海道の

札幌農学校や、三田育種所など、各種の学校や研究所があいついで設置された。このように、ありとあらゆるインフラが整備されていった。

(7)宗教

宗教的には、祭政一致の古代に復す改革であったから、慶応3年(1867年)旧暦正月17日に制定された職制には神祇を七科の筆頭に置き、3月(旧暦)には神仏分離令が布かれた。そして当時の復古的機運や特権的階級であった寺院から搾取を受けていると感じていた民衆によって、仏教も外来の宗教として激しく排斥する廃仏毀釈へと向かった。

また、キリスト教(耶蘇教)は、新政府によって引き続き厳禁された。キリスト教の指導者の総数140人は、萩(66人)、津和野(28人)、福山(20人)に分けて強制的に移住させた。

慶応4年4月21日、勅命により湊川神社に楠木正成を祭ったのをはじめとして、それまでは賊軍とされ、顧みられることが少なかった新田義貞、菊池武時、名和長年、北島親房、北島頭家ら南朝の忠臣を次々と祭っていった。

明治2年(1869年)12月7日には、キリスト教信者約3,000人を、金沢以下10藩に分散移住させた。しかし、明治4年(1871年)旧11月、岩倉具視特命全権大使一行が欧米各国を歴訪した折、耶蘇教禁止令が各国の非難を浴びて、条約改正の交渉上障碍になるとの報告により、明治5年(1872年)に大蔵大輔の職にあった井上馨は、長崎府庁在任時に関わった事から、明治5年正月に教徒赦免の建議をした。

神道国教化政策との絡みや、キリスト教を解禁しても直ちに欧米が条約改正には応じないとする懐疑的な姿勢から来る、政府内の保守派の反対のみばかりでなく、宗教界や一般民衆からも「邪宗門」解禁に反対する声が強ク紛糾したものの、明治6年(1873年)2月24日禁制の高札を除去し、その旨を各国に通告した。各藩に移住させられた教徒は帰村させ、ようやく終結した。

(8)法律

明治初期の日本は、不平等条約撤廃という外交上の目的もあり、民法、刑法、商法などの基本法典を整備し、近代国家としての体裁を整えることが急務であった。そこで、日本は、法学研究目的での海外留学を積極的に推し進めたほか、いわゆるお雇い外国人としてフランスの法学者ギュスターヴ・エミール・ボアソナードを起用するなどし、フランス法及びドイツ法を基礎に、日本特有の慣習や国情にも配慮しつつ、法典の整備を進めた。刑法は1880年(明治13年)に制定、2年後に施行され、民法は1896年(明治29年)に制定、1898年(明治31年)に施行された。日本は、アジアで初めて近代法の整備に成功した国となり、不平等条約の撤廃も実現したが、近年グローバル化の進展の中で、アジア各国が日本に法整備支援を求めていることには、このような歴史的背景があるとも言われている[9]。

(9)文化

新時代「明治」の雰囲気醸成されていき、人力車や馬車の普及、鉄道の開通、シルクハット・燕尾服・革靴・こうもり傘などの洋装やザンギリ頭、パン・牛乳・牛鍋・ビールなど洋食の流行、ガス灯の設置や煉瓦造りの西洋建築などである。

自由民権運動がしだいに活発となり、徳富蘇峰が平民主義と欧化主義を唱え、民友社の設立し、『国民之友』を創刊し、それに対して三宅雪嶺は国粹保存主義を唱えて政教社を設立し『日本人』を発刊、志賀重昂らが参加した。陸羯南は日刊新聞『日本』で国民主義を唱え、近代俳句の祖である正岡子規らが記者を務めた。この『日本』のような新聞が、徐々にさまざまな人々によって発刊されていくことになる。民間新聞のはじめは幕末に創刊された浜田彦蔵の『海外新聞』であり、沼間守一の『横浜毎日新聞』、福地源一郎の『東京日日新聞』、栗本鋤雲の『郵便報知新聞』、末広重恭の『朝野新聞』などがつづく。

(10)教育

それまでは各藩ごとに独自の教育制度があったが、地域差が大きく、与えられる教育も異なっていた。それまでの教育では身分等で分けられており、学校教育の偏りが一部存在していた。明治になり、政府は日本を強国にするためには、西洋のような一般国民にまで広く門戸を開いた、全国一律の教育制度が必要との認識に立ち、義務教育が開始された。

1872年(明治5年)に学制が公布され、1886年(明治19年)には小学校令や帝国大学令が發布された結果、全国に尋常小学校や高等小学校、大学が設立され、徐々に一般民衆も高度な教育を受けられる環境が整った。

また、明治になると女子教育の必要性も叫ばれるようになった。特に海外渡航の経験があって、欧米の女子教育を目の当たりにした渋沢栄一や伊藤博文たちは、その必要性を痛感しており、彼らによって女子教育奨励会が設立された。同じく女子教育に理解のあった黒田清隆は、欧米に10年単位の長期間、留学生を海外に派遣する岩倉使節団に、女子留学生も加えさせた。この時の留学生、永井しげ、津田うめ(後に津田塾大学の関係者となる)、大山捨松は、日本の女子教育に大きな功績を残すこととなる。

1874年(明治7年)に女子師範学校が設立された。女子への教育は、老若男女を問わず、学問に対する批評が根強かったため、男子への教育に比べるとその歩みは遅々としていた。しかし、徐々に女性への教育の必要性は広く浸透していき、女子も義務教育、高等教育を受けられるようになっていった。

(11)外交政策

新政府にとって、最大の目標は欧米列強に追いつくことであり、そのためにも旧幕府時代に締結された不平等条約の改正が急務とされた。上記の岩倉使節団は西欧諸制度の調査も目的であったが、条約改正のための下準備という面もあり、実際交渉も準備されたが、日本を近代国家と見なしていない欧米諸国からは相手にされず、まだ、時期尚早であった。そのため、欧化政策など日本が西洋と対等たらしとする様々な政策が行われたが、条約改正自体は半世紀におよぶ不断努力を必要とした(→条約改正)。

一方、不平等条約の失敗を鑑とした政府は、アジア諸国に対しては、平等以上の立場を確保することを旨とした。清との間には明治4年(1871年)対等条約である日清修好条規が締結される。明治7年(1874年)には台湾における宮古島民殺害事件をきっかけに台湾出兵が行われ、両国の間で台湾・沖縄の帰属が決定されることになった。

李氏朝鮮との間では国書受け入れを巡って紛争が起こり、明治6年(1873年)には政府を二分する論争(いわゆる征韓論)となったが、明治8年(1875年)に起きた江華島事件を契機として日朝修好条規(江華島条約)を締結し、朝鮮を自主国として認め、開国させるに至る。

琉球に対しては、明治5年に琉球藩を設置し、明治12年には琉球処分が行われる。

また、ロシア帝国との間では明治8年(1875年)に、千島樺太交換条約が締結され、それまで日露雑居地とされた樺太および千島列島における日露国境が確定した。

●日本における産業革命

<その意義と時期>

鉱工業や運輸業に機械が導入されることにより、資本家と賃金労働者からなる資本主義的な生産様式が発展し、小規模生産を駆逐して、日本経済全体の中心を占めるようになった画期。機械の導入そのものは、幕末の幕藩営工業においてもみられたが、民間の綿糸紡績業や鉱山業などに次々と機械が導入されたのは、1886年(明治19)の銀本位制移行を契機とする企業設立ブームにおいてであり、このときに日本産業革命が始まったとみてよい。終了時点については、機械制綿糸紡績業の確立(1897年に綿糸の輸出量が輸入量を上回ったことを指標とする)をもって終了とみる説もあるが、日露戦争(1904~1905)を経て、民間の鉄鋼業や機械工業が発展し始め、織物業に力織機(りきしょつき)が導入されて手織機(ておりき)を圧倒し始める1907年(明治40)ころをいちおうの終了時点とみるのが通説である。

<発展のアンバランス>

日本の産業革命は、産業部門ごとの発展が不均等であり、部門の間のつながりも不十分であった。農業部門では大規模農場へ発展するものがまったくなく、商品貨幣経済に巻き込まれて競争に敗れ土地を失った農民たちは、高い現物小作料を払って地主から土地を借り、小規模生産を続けた。小作農家の生活は苦しかったため、娘たちの多くは繊維工場へ出かけて安い賃金で働かなければならなかった。小作農からさらに転落した者は、近くの都市などで仕事にありつけない限り、炭鉱や金属鉱山へ流れ込んで地底での重労働に従事した。産業革命が終了したころの資本主義的生産の状態は、繊維工業と鉱山業に500人以上の大規模作業場が数多くみられ、賃金労働者(職工・鉱夫)も両分野に集中していた(表1)。これらの分野の労働は比較的単純なため、低賃金労働者が豊富な後進国日本は国際競争で有利な位置にあった。これに対して、重工業(=金属・機械工業)のように多額の設備投資と熟練度の高い労働者が必要な分野は、なかなか発展できなかった。急成長を遂げた綿糸紡績業は、必要とする紡績機械をもっぱらイギリスから輸入しており、日本の機械工業はせいぜい修理を担当する程度であった。もっとも、製糸業の繰糸器械はほとんどが国産であり、織物業の機械化に際しては豊田佐吉(とよださきち)らの発明した安価な国産力織機が普及するなど、繊維工業と機械

工業の間のつながりは、しだいに強まっていったことも見落としてはならない。以下、おもな部門の発展のようすをみてゆこう。

<繊維工業>

日本産業革命を代表する工業部門は綿糸紡績業であった。渋沢栄一らが設立した大阪紡績が、最新式の輸入機械と安い輸入綿花を使い、女工を昼夜二交替で働かせて高利益をあげたのに刺激されて、1880年代後半に大阪、東京、名古屋などの大都市商人が出資する大規模紡績が続々と設立された。国産の機械制綿糸は、輸入インド綿糸を数年のうちに国内市場から駆逐しただけでなく、中国・朝鮮へと輸出され、1913年(大正2)には中国市場においてインド糸輸入量を超えるまでになる。しかし、昼夜二交替制労働は女工の体重を減少させ結核患者を多発させたため、1911年制定の工場法(1916施行)において、女工の夜業禁止が定められた(ただし同法施行から15年間の適用猶予付き)。

養蚕農家がつくった繭を原料として生糸を製造する製糸業は、最大の輸出産業として多額の外貨を稼いだ。富岡(とみおか)製糸場のフランス式鉄製繰糸機などをモデルに軽便かつ安価な木製繰糸機がつくられ、1870年代後半から長野・山梨・岐阜などの農村にたくさんの器械製糸場が設立された。製糸家は輸出港横浜の生糸売込問屋や地方銀行から借金して原料繭を仕入れ、出稼ぎ女工を長時間働かせて生糸を生産した。女工の賃金は、工場内の全女工の賃金総額を固定したまま彼女らの繰糸成績によって分配されるという等級賃金制であったため、女工は長時間にわたって緊張した仕事を続けねばならず、しかも能率上昇の成果は全体として製糸家のものとなった。製糸業の中心地長野県諏訪(すわ)では、製糸家が同盟して女工の登録制度をつくり工場間の移動を禁止したので、彼女らは厳しい労働条件を耐えなければならなかった。

<鉱山業>

石炭と銅は当時の重要な輸出品であった。1890年代から諸鉱山の主要坑道に巻揚機械が導入されたが、切羽(きりば)での採掘と主要坑道までの運搬は手労働であり、地底での労働はたいへん厳しかった。筑豊(ちくほう)の炭鉱では夫婦が仕事の単位となり、夫が狭い切羽で掘り出した石炭を妻が竹籠(かご)に入れて炭車まで引きずってゆく姿がみられた(女子坑内労働禁止は1933年)。こうした危険な重労働に従事する労働者を集め、彼らの生活を会社にかかわって管理したのが、納屋頭(なやがしら)とか飯場頭(はんばがしら)とよばれる人々である。金属鉱山では鉱毒水や亜硫酸ガスによる鉱害がかならずといってよいほど発生し、周辺住民との間にトラブルを生んだ。鉱夫の酷使に支えられ、周辺住民へ鉱害を及ぼしながら、鉱山経営は大きな利益をもたらしたため、三井、三菱(みつびし)、住友、古河(ふるかわ)などの大財閥の最大の蓄積基盤となった。

<重工業>

職工3000人以上の大工場は、官営の陸海軍工廠(こうしょう)と八幡(やはた)製鉄所が、紡績工場群を押さえて上位を独占していた。これら巨大軍工廠を中心として、日露戦争直後には兵器・軍艦の国産化が達成された。鉄鋼業の発展においても官営八幡製鉄所の設立(1901)は決定的な画期をなし、同製鉄所はレール製造などを行うとともに軍艦建造用の鋼材を供給した。一方、民間重工業もそれなりの発展を開始していた。1896年に欧米定期航路を開設した日本郵船など海運諸会社と結び付いて、三菱、川崎などの造船所がとくに発展し、また、1906年の鉄道国有化の直後には蒸気機関車の国産化も達成された。さらに、住友鑄鋼場、神戸製鋼所、川崎造船所鑄鋼工場、日本鋼管などの主要民間製鋼メーカーも日露戦争前後に発足した。そして、1897年には、東京砲兵工廠、新橋鉄道局、日本鉄道大宮(おおみや)工場などの鉄工(鉄を加工する旋盤工・仕上工・鍛工など)を横断的に組織した鉄工組合が、日本最初の労働組合として結成される。産業革命を通じて生み出された階級対立が早くも重要な社会問題となったわけであるが、政府は治安警察法(1900)を制定して幼弱な労働組合を抹殺した。

<貿易赤字と外資依存>

以上のような日本産業革命は、外国からの資本輸入に頼ることなくほとんど自力で進められた。鉄道、鉱山、銀行などへの外資導入は政府によって排除され、日清(にっしん)戦争後に規制が緩められたが、流入した外資は限られていた。そして、日露戦争の戦費調達のための巨額の外債発行が契機となって公債の形で外資依存が一挙に強まったが、1894年から恒常化していた貿易赤字はなかなか解消せず、第一次世界大戦直前の日本は破産寸前の状態に陥っていたのである。

以上